



常山紀談

三

4 13
561
1



門 113
號 561
卷 1

備前藩湯淺先生編輯

常山紀談

書肆

千鍾房
宋榮堂製本

常山紀談序

常山紀談者。備前湯君之祥。紀戰國將士武功也。權

謀形勢備矣。於馳驅周旋。蓋獨詳焉。世之君子。動謂

兵顧將畧何如耳。馳驅周旋。匹夫之勇。非所尚也。此

不謗古者也。不通今者也。三代之世。寓兵于農。卿出

為將。善射御。先士卒。勇敢有力。養之禮義。用之戰爭。

士卒亦以武自喜。左氏具載焉。春秋之時。師徒撓敗。

至泯社稷。而死者不過千百。則先王之遺也。秦漢以

來。文武異官。大將不手兵。兵發於卒伍。雖數立軍功。

擢至將萬人。而黥面刺臂。目不識字。士大夫視以為

序一

113
561
1-10

天正十五年二月
花房仙次郎氏寄贈

奴隸人人不自重。惟以賞罰威之耳。時將亦制陳法。明懸令以一切立功。終不能使士卒自喜焉。後世之戰。僵尸百萬。功唯數大將。而裨將以下。無一傳名者。兵制異也。故謂先王之世。不尚馳驅周旋者。不誓古也。昔者皇朝軍團取法。隋唐第異邦俊民。皆從事科舉。推魯亡識者。乃為兵我。邦則公卿世官。州郡之民。不舉朝廷豪傑之士。不在南畝。則為兵。東夷數叛。源氏世將。恩義下結。武人漸貴。保平之後。皇綱解紐。自鎌倉至室町氏。日尋于戈。時將皆賴士卒之勇。以決勝。人自為戰。未暇遑講兵法也。至甲越二公。稍

有節制。而士愈益自喜。以接勝國名。垂竹帛者。數百人。神祖初起。尤名得士。一統宇內。封建諸侯。諸侯亦各建將帥。為卿大夫。世其祿位。寬永以後。有兵家者。流潤色。甲越遺言。以教人舉世宗之其人。守一家所傳。不用心於將士之談話。戰國之事。往往失實。或又謂戰國時。多屢軍立功者。故諸將不吝爵祿。以畜士。太平已久。世無喋血。有如萬一邊圉有警。則莫如遵異邦之法。明法令。嚴賞罰。以率之。近世將士之談。無所用也。殊不知異邦之兵。皆卒徒。故唯可以法使也。我邦士大夫。皆出自武騎。國家待士。養其廉

恥。使人人自喜。平生待以君子。則臨事不可徒以法令約束之也。故謂馳驅周旋。非當世所尚者。不通今也。士大夫不聞將士之談。則無以自勵。人君不聞將士之談。則無以作士氣。在今兵法之要。莫先於近古將士之談。今列國士大夫。莫不學兵法。習武藝。而不用心於將士之談。教者之過也。世多野史。志戰國之事。真偽雜糅。言無統紀。獨湯君折衷百家。撮其雋永。以垂不朽。國初以來。未之有也。其書務崇節義。雖小必錄。末又概載國朝太平君臣言行之美。以翼名教。蓋其善志也。君世仕西藩。落落寡合。弗為名計。

世。豈知君者。為人博學篤行。器識高邁。當世未見其倫。此書也。行人其庶幾窺豹之一斑矣乎。常山備之望也。君居有常山樓。

明和丁亥九月甲子

龜山松崎惟時撰

予嘗慨往事之焚々。若滅若亡。傳於今者。何寥寥哉。蓋載籍未備。世遠磨滅也。夫前言往行者。得失之林。君子可以觀世矣。載籍散佚。不獨吾邦為然而已也。倚相之丘索。惠子之五車。向歆孟堅之所錄。逞々乎零墜。而况吾邦乎。於乎。室町氏以前。亡論已。及群雄虓鬪。並為戰國。網漏吞舟之魚。疆場多壘。采山煮海。塞井夷竈。信々乎沐猴哉。豐王以竊金黔首攘臂。乎草野。奮其威詐。雷震霆擊。鞭笞海內。三韓草靡。安知非魃龍絕氣。紫色蜚聲。聖王之驅除乎。宜哉。不祀。忽緒。其間仁人義士。齋志吞憤。以沒世者。卓行懿範。湮盡罔聞。豈不悲邪。迨吾

神祖聰明神武。革命創制。解民倒懸。列朝重熙。百年謚如。或遇大史氏采簡錄。謀臣經國之略。武夫野戰之功。則何以哉。湮盡罔聞。豈不惜乎。予適每有勝國以來遺逸事。得諸敝篋。斷簡聞長老黃髮所謂。記廼劄牘。識之往事之焚々。庶幾存十一於千百。匪有意於備不朽。竢大史氏之所索也。近者取而閱之。其所識多國俗捍擗。所熹技擊相高。賈勇搏人之談。犬鷹之事哉。其人骨已朽矣。庸何足傳乎。後世予於是乎。重慨之烏乎。保平之間。源平迭興。上義踰死。尚信伏

節。習^ヲ以^テ成^ル性^ト。孰^{イッレバ}與^マ元^ノ天^ノ之^レ際^ニ。士^ハ無^ク常^ノ君^ト。國^ハ亡^シ。定^ム臣^ト。朝^ヲ委^ス質^ヲ。而^{シテ}夕^ニ倒^レ戈^ヲ。戎^ノ首^ト者^ト乎^カ哉[。]風^ノ俗^ノ之^レ道^ト。士^ハ為^ス政^ヲ。前^ニ言^フ往^リ行^ク。得^ル失^レ之^レ林^ト。君^子可^シ以^テ觀^ズ世^ヲ矣[。]是^レ為^ス序^ト。

元文四年己未五月九日

湯元禎

常山紀談凡例

一 凡^レ此^ノ書^ハ天文永祿の比^{ヨリ}恭^ニ平^ニ及^リ及^リ中^ノ之^レ事^ト實^ヲをあるめたるなり。戦國の時勢^ハ國^ノ初^ニれ風俗^ハ武人^ノ乃^チ玄^ニ行^ク是^レ皆^ク世を觀^ルる人の尤^モ儆^ムべき事^トなり。是^レ輯^ス録^スの本意^{ナリ}なり。明^ノ君賢^ノ佐^ノ乱^レ臣^ノ奸^ノ賊^ノ乃^チ勸^ム懲^ム小^ノ具^トなるを記^スす。其中^ニ小^ノ見^レぬれば必^ズしも評^ス論^スをあるべき。

一 吾^レ國^ノ士^ハ風源^ハ平^ニ世^トと戦國^ノの世^トと実^ニ同^クなる事^ト非^ズ。凡^レ古^ノの風信^ハを尚^ヒび義^ヲを尊^ビび節^ヲ標^トを重^クんじゆる事^トも古^ノき物語^トより見^レるより我^レ國^ノの士^ハ多く利^ノ名^ヲを貪^ムふ事^トあり。今^ノ川^ノ氏^ハ真^ノの没^レ落^シ北^ニ條^ノ氏^ハ改^メて滅^レ亡^シ。其^ノ時^ニ死^シ小^ノ殉^シる人^ハ少^クし。されば節^ヲ儀^ノの士^ハ此^ノ姓名^ヲを逸^スせん事^トなり。かくはとめて

殉難忠臣は姓名を志すも又此書の本意あり

一 戦國の間紀載詳ならず相傳ふ亦誤まらざる少かるべ

一事として異説多きあり同矣孰より是を志すべし其説々

をも悉志せり人此姓名及年月の審なりざらば只記

傳へかり傳ふるもふ志せり此校するも典籍のあら

まじりあり

一 戦國の武者詞一種あり抄りれといはれしといふ

ゆきと種あり皆其傳へしものなるべし又いひ傳ふる世

の詞も其傳へしものなるべし其文字を脩飾せざる事ハ

其世代より久しく記録乃実不実分れざる故あり左傳ハ

其世の実録として公穀乃二書ハ其世の志すべし其

詞より久しく記さればなり然も其大小謬まらざる事
てハ改志せざるあり世人甲をわぶと曹をよらひといふ
めさハ皆改志せり

一 賞譽すべし事少非ざるを志せざるあり是ハ唯其世の

事ハも心得ざるなり天正年中肥後の有動を秀吉

柳川にて殺されし時立花宗茂有動が其の供として来り

新田吾良が剛此者ありとく惜して告あせられし善

良其身を有動にかくして告あせり運をひくべし其

なることを知りきればこそ主君の明日禍ふかざる事

告ざるをいふて其時と褒めしる也此ハ非義の義あり

卷一の事はバから類は此書にせしむべし

常山紀談卷之一目次

- 一 長尾輝虎越後を治めし事
- 一 輝虎平家を誇らせし事 附 佐野天徳寺の事
- 一 参河國伊田合戦の事
- 一 近江國音羽城軍此事
- 一 荒木安藝守討死の事
- 一 甲斐國葦崎合戦乃事
- 一 寛平三郎功名の事
- 一 佐伯惟常高崎城を衆取事
- 一 比條早雲智計の事
- 一 毛利元就嚴嶋合戦 附 盲人間者の事

- 一 元就伊豫の河野に船を借まじり事
- 一 那須の長大関夕安深慮此事
- 一 太田持資哥道志と事
- 一 持資京上上り時の事 附かゝる記の歌は沙汰
- 一 木全知矩連歌の事
- 一 輝虎私市城を攻らむ事
- 一 輝虎太田三楽が子を質し取りし事

常山紀談卷之一

備前國 湯浅新兵衛元禎輯録

○長尾輝虎のまはる名を猿松とす

輝虎始ハ景虎といふ後京上上られし時公方より輝虎の字
 を賜て輝虎と称し鎮守府將軍良兼四代の孫左衛門尉
 致經二男村岡五郎忠通が末に女は長尾と称し後管
 領上杉の謙を以て上杉と称し甲陽軍鑑に梶原景時が
 末孫といふことあり

兄を三郎といふ猿松あり者少く父為景の心よくむくそは母
 の鏡言ふとぞいふかゝりて出家せしめて下越後の楡原
 淨安寺小退やれけり金津新兵衛供へて末山越へり

了時猿松八景あまのばからの士背ふかた負て山を登り巖あり
堂ふあり居く破籠やれものとう出さうわうせり猿松
遙頭城府内を恥やりやうう遠ぶみく我かくわらふ
るいそそそとれやぞ軍をおうして志をとくたうは此
山ふら登り府内を目の下に足おろはべいあふき軍の地
ありといそれい乳母子ある本条美作守も舌をふい其
切をいす神さひそと悦りあり

一説小為景猿松と憎みて女傳城越前さふあづけらる此
時十二歳そまより諸國をめぐりて風俗をえ人情を察
地の利を窺ふといなり

かくて猿松九年の間寺ふられと僧もあふとも志あり天文

十四年為京越中より討死あり嫡子三郎暗弱少く越後乱
まきおを敵小掠奪まきりいふ父の吊軍せんと思ひ立宇
佐美駿河も定行をかきいひ天文十六年正月十八歳して元
服一平三景虎と名のり猿尾の城に旗をあがれり三郎
をもつ長尾越前も政景小七千は兵をそへて攻りい
景虎矢倉小ありて敵ハ今表引くもなき扱らありといれ
らるを定行ゆてとらくと攻まり空しく退くをきやといふ
景虎敵も小若駒なり久く囲むべき計小あふといひき退ん
處を静バ猿松と疑なりといそれなま定行も統るべいとて
夜中ふあて出た京として政景の軍みだれさうと敗北けり
三郎又お向ふ京虎柿崎の下濱小隊をさうりやぞ三郎をお

やがて三郎府内をたしき引退く時景虎采山の東坂本ゆく
我福むり定ざり休て後追うるやとて小室入る定
仍あるぞくもちりと追討あは破竹の勢とハ是あはる
とてとも言ひびきかきて眠らまうるは皆かゝる時を失ふ事
よとながきあへりやとて京虎つと起あがり三郎の軍兵山
を三今の一向あつた越しりといきゆいさ追討やとて馬山の里
螺の貝吹きてはせ亀破坂よりおろしけ大お侍れかり
定行りよ此を撃べき時る眠せられハ山を追上る人
敵をかきようけをバ利有べし敵下り坂ふなりて引立るを
うんとよまあり是老臣等及ぶるさかゆらばとやハわづ
十八歳弓矢をとる事推やの人肩をちかんとぞかたりる

景虎越後を治め侍り高野山に退せんとい長尾家の兵
たお集り京虎おくバ國を敵小奪をばいざとて関の山に
おひ移てさゆらとめられバ京虎のいづく我年とて威重
くは老臣等我を誑せし國の根本をば此國人の爲小利を
求るハ我身は害をまひらなり是より後吾命を背くあり
とてハ林文をまきて得させよとてははとてやうとていそれ
くふもあはるる君と仰ぎまらたたりいそ命を叛きや
ぶるこやうまははとてまゆり三郎を隠居させしより
威をふらひ越中攻入て父は吊軍とげられり長臣の中
二心ある者を林泉寺といひて腹切せて國を治められ
けり晩年謙信と稱しぬ

○輝虎あゝ夜石坂揆校し平家をかゝりてて守まじり不鶴は
段をやりて志さかりに三度逢せりかゝの者どもあやしく思
ひらまじバ輝虎のいらく吾國の武徳も衰へりてたぢや
昔鳥羽院は序時禁中小妖怪ありてハ幡太郎の
て鑑府將軍源義家と名のりたれば妖怪忽消ぬやいり
女房頼政を討せりども杉死して井野軍人さう殺
てとてとせりやゆ義家時法せりハ天仁元年は事れり
鶴乃出ハ近衛院仁平三年あまハ僅小四十六年あまハ武
徳既小おとせりともゆり今又頼政小杉とて事
六十年され又頼政小おとせり遠くへりてバおぢや涙の
流るるよとて語られり又おぢや物語あり附記を相

州北條の幕下佐野城主天徳寺勇将ありてあま時
色法師よふ家と語りてせりふいふと語らぬ先
ハ唯何とてあまゆとてせりあま心持やよといひ
小法師美いといひ佐木高綱が宇治川の先陣と語り出
ア〜天徳寺兩帝と涙をちりて泣きたりりりりり入
今一曲あのごとくつれなき事とせりといひハ那須興
が崩れのをめり半及て天徳寺より流涙殺し小及
より後日小側仕へり老も小返り日ハ平家ハハ同
〜は皆面白き事とせり但一つ心得ぬ事とて入
二曲とも小勇と末功名ありてありてありてあり
いふぬ小君ハ流涙涙とむせりせり今に不審あり

とやあひいといふ天徳寺オドロに於て只今といひ各を救母カノモし
とひいひい今此一言を力チカラを落し置きてと先佐木が
事をよく心よりわけて見られへ右大将舎弟此蒲冠者カバクラシヤも賜ミタマ
らば寵チカラを賜ふも賜ふも女生メウマキを言綱ツカフナの師シふふの
甲斐もなく此馬もく宇治川の先陣せだして人先をこ
されを必討死してぬらび帰るまじ暇乞イダヒゴヒして出づる其志
ありまじぬまじいと志づく候をのどひは志づありて
いひくハ又那須與一人多さ中より搦エラむれて只一騎陣
頭イデ不出しより馬を海中に棄入くの的ヒコのむらふまを源
平両家ナカを志づめく是を足物タビモノなり射損イッソクになら味
方カタ名折半ナハ馬バ上ウく腹ハラかを切て海に入人と思ひ定め

志を志サツして見れば弓矢ユミヤも及ばずとあはれあはれ
いづれもいづれも戦場ヒシバヤに修カミへ高綱宗高タカツナムネタカが心を陰カゲを取
ゆゑ右の平家をや時も兩人の心成とひやり居後イノチになら
し然シカるも各オノオノいづれも思ふも各オノオノ武ムスを志サツし
且タの勇氣イサナのせして眞実マコトより出デるはなれやと思はれ
夫ツレもハ救母カノモしとあがきまゝと我

○善徳公

御諱清康安祥二郎
三郎殿と世に稱し申す

士卒シウソクとあはれし勇材ユウサイありし

せし人々く其徳チカラよりびき従シムカひ奉ホウまじり尾張國オウヅ小向コムカウせし
森山モリヤマ陣ジンせし方カタも戸ドひし不慮フリヨの事出来イデキて安部アベ孫ムコ七
郎シチロウ弒コロスしなり植村出羽守ウヅムラヒノシいま新太ニホウ郎ロウ
が十六歳ジュウロクサイの侍例シヤウレイ者モノ合アヒせ孫ムコ七郎シチロウをバくウちカすル誅ツカサしてけり

御家人をせあつかりて唯うされ居り植村人に向て侍
敵を既^ス切て棄てはひむ事なり腹切て侍供可侍
り人主君のかききき人者をせらるるうち一は功
り不及まよひ者とも侍側あはれは誰う侍側あはれ
まは侍側一人孝侍側よりこれ神明の冥助とやうべた
はまは腹切て冥途の侍供やさんりまは誰う侍身おはれ
べたまは各も亦存のごとくぬきやひて可侍おは必死
近きありてりいづこ後きんとも存せんとは言ふ植村
やてせ必死はぬ何と問ふ侍時抑はれ必死は言ふ十日と
るくは殿かくかきせむいぬとたつたの方お言えは弾正
忠信秀方軍勢をひきめて岡崎を攻めらんとれらるる腹

きくは誰う若君の侍為し矢の一はちもかづり村出
づきしはばりれは侍死ハ此時は有と覺ゆ同どく死せん命
まはまは十日を隔つては侍が切腹を志ひてせんとも
能どとりは植村に多ては侍理をさすはんと俱小同どく
討死をせんとして侍は引返して案ながら織田信秀八千
の兵を引率して三河に圍ひ打入り大樹寺に陣をとり
此時内膳正信安も背きまはせ上野の城に立てて兵を
めりまは属せ國人とも多く心変りてり引返しては
侍亦人亦僅か八百人わり君は侍略を以て一同にたれ
まげびては打出りては二はふりちて伊田のりあはれ打て
出づ世人の義心を神の感づひり人此所は見えまひ

八幡宮の鳥居にわたる方小向て六尺竹うらぶく動き
こそ不思議ともし傳りあまし人々大ふ力を得てよせま
敵をさうやむし此取上六雲枯の砂路もさふ下賤が田
面小かよさ一さぢあり織田家軍も同どく二手小ぬて上
道下さこさふ向てよせ来る八幡の宝殿此方よりし向
羽の矢ありまうかここの上よおらかると見物の人此目か
てりり上小向ひ一味方野ハひろし中ふさうさえられ一人
のさす討死を植村下道より向てまきとかく味方僅小
四百人四千のかつたをお破り又上さし行向ふ野路の
さし散るよとれ立信秀かこさいのり生て尾張國引返
まあま伊田の合戦とて十倍の敵に備しゆたあすか

まして大将ましすはぬ軍していけあは君をたてし
古今無比歎るべしと義忠の節操を後りはくく美
認とせり

○文龜三年細川武藏守政元の長澤倉とつら者武畧ありて
近江を半切さるるれども蒲生下野も貞秀入道知閑音
羽の陣に控て沢倉と軍は沢倉音羽と山城あれば水乏し
かんとて水の手をやり切さり知閑敵より見ゆる矢倉のあ
小馬もあまし率出させ白くあけさる采を桶に入
うけく人々驟かたりて馬を洗ひ沢倉遙く見て思ひの外
小世城水多しかくて久し陣せば兵糧あまんとて囲を
とめて引退くまを知らぬ内はよくまりの小倉をりての要害

小較^{ウツ}手^テて出^テ一回^ニ切^リくり十分^{セウリ}の勝利^ヲを得^ユきう知^チ関^ノ氏^ノ郷^ノ
の祖父^{オホヂ}なり

○大永年中細川武藏守高國^{ムサシノ}入道^ニ道永^ニ三好^{ミヨシ}左衛門^{サカ}督^カと我^ガ我^ガ三好^{ミヨシ}桂川^{カヅラ}を渡^ワりて三好^{ミヨシ}の侍^シへりよす波^ハ多^タ野^ノ備^ビ後^ノ高國^{タカクニ}怨^{ウラミ}あつて丹波^{タニハ}の兵^{ヘイ}を引^ヒ具^グ一^ニ金^ニ一^ニ叛^{ソム}き三好^{ミヨシ}小^コ共^ト一^ニ引^ヒれば三好^{ミヨシ}の軍^{イクサ}敗^マれり高國^{タカクニ}は將^{アラキ}荒木^{アキキ}安^{ヤス}藝^ギ百^{ヒャク}むりの兵^{ヘイ}を引^ヒりて人^{ヒト}々^ト世^セをさるる月^{ツキ}花^{ハナ}酒^{サケ}宴^{ユヱン}の時^{トキ}は河^{カハ}は似^ニたり一^ニ恥^チをもち弓^{ユミ}をうたれた世^セありや日^ヒれ只^{ただ}今^{イマ}道永^{ミチノリ}の爲^{タメ}に命^{イノチ}をすて恩^{オン}を報^{ウラ}へりは道永^{ミチノリ}の志^シたたりし戦^{セウ}場^バを引^ヒ退^ヒきりとも人^{ヒト}並^ナまばらにち糧^{シヨリ}のみ減^マるべしとわかれへども義^{ヨシ}を義^{ヨシ}とせざりて弓^{ユミ}をうたれり非^{オチ}ど各^{オノオノ}又^{また}真^{マコト}の士^シとあり

日^ヒを同じく義^{ヨシ}をぬらんやいとととて強^{ツヨク}べしといふと
いへば皆^{みな}六^む口^{くち}懐^{くわい}をいひて日^ヒ比^ヒの要^{ヨウ}存^{ゾン}をあらうめとて
是^{こゝ}にいふが如^{ごと}く時^{トキ}をあらわすをすべしとてサ^スも
落^おちてさきさきなり荒木^{アキキ}さぞあり寔^{ニコト}に主^{ミウ}後^ゴの契^{ケキ}世^セの
はつていふこととおもひて京^{キョウ}軍^{クン}は崩^{クズ}れをうたれりといひ
とれんを待^マちて阿^ア波^ハ丹^{タニ}波^ハの兵^{ヘイ}競^{キソウ}ひかると問^{アヒ}をく
けられを誰^{タレ}ともあはれ領^{リョウ}の下^ノに荒木^{アキキ}安^{ヤス}藝^ギをとりて老^{オシ}と
呼^{ヨブ}り一回^ニはあがり先^マけし敵^{テキ}十^{ジュウ}人^ニむりてはと伏^{フス}まはさる
處^{トコロ}を追^ツりて年^{ネン}五^ゴ六^{ロク}十^{ジュウ}回^ニをうりて限^{カキ}りてはと折^マりては
べつて遠^{トホ}く追^ツつめて疲^{ツカ}れしを志^シと又^{また}そと折^マりてはと
敵^{テキ}を待^マちけりてはとをけりて度^{タビ}とれりて執^{シツ}ひてはと敵^{テキ}

討^{カス}く老^{カス}教^{カス}を^{カス}あ^{カス}げ^{カス}ば^{カス}荒^{カス}木^{カス}を^{カス}従^{カス}一人^{カス}もの^{カス}ら^{カス}し^{カス}て^{カス}討^{カス}死^{カス}す^{カス}
間^{カス}ふ高^{カス}國^{カス}僅^{カス}小^{カス}近^{カス}江^{カス}の^{カス}が^{カス}れ^{カス}ば^{カス}荒^{カス}木^{カス}平^{カス}生^{カス}士^{カス}卒^{カス}を^{カス}愛^{カス}す^{カス}
小^{カス}悃^{カス}情^{カス}を^{カス}あ^{カス}せ^{カス}り^{カス}古^{カス}へ^{カス}の^{カス}食^{カス}を^{カス}金^{カス}衣^{カス}解^{カス}楽^{カス}を^{カス}回^{カス}苦^{カス}を^{カス}共^{カス}小^{カス}
す^{カス}は^{カス}風^{カス}あ^{カス}る^{カス}や^{カス}の^{カス}功^{カス}あ^{カス}る^{カス}人^{カス}を^{カス}す^{カス}は^{カス}ら^{カス}し^{カス}て^{カス}討^{カス}死^{カス}す^{カス}荒^{カス}木^{カス}が^{カス}ま^{カス}り^{カス}
ゆ^{カス}ら^{カス}る^{カス}人^{カス}と^{カス}荒^{カス}木^{カス}が^{カス}士^{カス}は^{カス}め^{カス}ら^{カス}る^{カス}者^{カス}と^{カス}俱^{カス}不^{カス}疫^{カス}痢^{カス}を^{カス}煩^{カス}ひ^{カス}ら^{カス}
療^{カス}治^{カス}力^{カス}の^{カス}か^{カス}ざ^{カス}り^{カス}小^{カス}心^{カス}を^{カス}付^{カス}て^{カス}ゆ^{カス}ら^{カス}る^{カス}人^{カス}も^{カス}す^{カス}ま^{カス}り^{カス}ら^{カス}れ^{カス}
は^{カス}ま^{カス}を^{カス}恨^{カス}み^{カス}ら^{カス}る^{カス}荒^{カス}木^{カス}縁^{カス}者^{カス}は^{カス}日^{カス}を^{カス}問^{カス}ひ^{カス}も^{カス}ん^{カス}を^{カス}附^{カス}く^{カス}人^{カス}あ^{カス}り^{カス}
何^{カス}が^{カス}一^{カス}賤^{カス}一^{カス}中^{カス}を^{カス}考^{カス}へ^{カス}人^{カス}お^{カス}ろ^{カス}そ^{カス}ら^{カス}に^{カス}せん^{カス}心^{カス}を^{カス}あ^{カス}ま^{カス}い^{カス}
療^{カス}治^{カス}お^{カス}ろ^{カス}り^{カス}ら^{カス}る^{カス}縁^{カス}者^{カス}を^{カス}お^{カス}ろ^{カス}そ^{カス}ら^{カス}に^{カス}す^{カス}ま^{カス}り^{カス}ら^{カス}れ^{カス}
重^{カス}く^{カス}と^{カス}處^{カス}し^{カス}心^{カス}を^{カス}せ^{カス}ら^{カス}り^{カス}無^{カス}事^{カス}は^{カス}時^{カス}ハ^{カス}縁^{カス}者^{カス}あ^{カス}る^{カス}一^{カス}と^{カス}
い^{カス}も^{カス}事^{カス}あ^{カス}る^{カス}時^{カス}ハ^{カス}士^{カス}卒^{カス}の^{カス}切^{カス}あ^{カス}る^{カス}あ^{カス}り^{カス}あ^{カス}る^{カス}一^{カス}族^{カス}ゆ^{カス}ら^{カス}

有^{カス}と^{カス}も^{カス}陣^{カス}と^{カス}れ^{カス}き^{カス}互^{カス}に^{カス}死^{カス}生^{カス}あ^{カス}れ^{カス}ど^{カス}士^{カス}卒^{カス}ハ^{カス}戦^{カス}場^{カス}に^{カス}
死^{カス}生^{カス}を^{カス}共^{カス}す^{カス}も^{カス}れ^{カス}ち^{カス}は^{カス}一^{カス}人^{カス}と^{カス}も^{カス}不^{カス}意^{カス}を^{カス}失^{カス}ん^{カス}り^{カス}大^{カス}
あ^{カス}る^{カス}患^{カス}れ^{カス}と^{カス}答^{カス}ら^{カス}る^{カス}士^{カス}卒^{カス}や^{カス}そ^{カス}人^{カス}の^{カス}思^{カス}を^{カス}思^{カス}ふ^{カス}事^{カス}骨^{カス}體^{カス}
小^{カス}徹^{カス}せ^{カス}り^{カス}と^{カス}ん

○武^{カス}田^{カス}晴^{カス}信^{カス}父^{カス}を^{カス}逐^{カス}の^{カス}後^{カス}諏^{カス}訪^{カス}頼^{カス}茂^{カス}小^{カス}笠^{カス}原^{カス}長^{カス}時^{カス}多^{カス}兵^{カス}と^{カス}甲^{カス}斐^{カス}小^{カス}
攻^{カス}入^{カス}し^{カス}葦^{カス}崎^{カス}と^{カス}一日^{カス}の中^{カス}小^{カス}合^{カス}戦^{カス}四^{カス}度^{カス}小^{カス}及^{カス}べ^{カス}り^{カス}晴^{カス}信^{カス}葦^{カス}崎^{カス}に^{カス}
向^{カス}し^{カス}時^{カス}諏^{カス}訪^{カス}小^{カス}笠^{カス}原^{カス}の^{カス}か^{カス}と^{カス}ゆ^{カス}ら^{カス}る^{カス}あ^{カス}る^{カス}若^{カス}原^{カス}加^{カス}賀^{カス}守^{カス}を^{カス}始^{カス}め^{カス}
て^{カス}あ^{カス}る^{カス}甲^{カス}斐^{カス}小^{カス}笠^{カス}原^{カス}人^{カス}と^{カス}向^{カス}ひ^{カス}ら^{カス}る^{カス}合^{カス}戦^{カス}小^{カス}各^{カス}に^{カス}
ち^{カス}功^{カス}名^{カス}を^{カス}と^{カス}り^{カス}と^{カス}あ^{カス}れ^{カス}ハ^{カス}二^{カス}心^{カス}を^{カス}疑^{カス}て^{カス}の^{カス}事^{カス}れ^{カス}し^{カス}
今日^{カス}敵^{カス}小^{カス}向^{カス}ひ^{カス}ら^{カス}る^{カス}長^{カス}く^{カス}弓^{カス}矢^{カス}と^{カス}る^{カス}羽^{カス}の^{カス}如^{カス}と^{カス}ら^{カス}る^{カス}い^{カス}ふ^{カス}と^{カス}り^{カス}
皆^{カス}二^{カス}心^{カス}た^{カス}く^{カス}疑^{カス}を^{カス}あ^{カス}り^{カス}と^{カス}敵^{カス}あ^{カス}ひ^{カス}て^{カス}討^{カス}死^{カス}せん^{カス}事^{カス}勇^{カス}士^{カス}

の志いひとくくられ先と並崎ふちせりりり此時暗佐
軍ととも三度戦ひ疲きくふし頼茂長時一もくうそ
進と来まごど既一危くんもくうもる来るふ力をたて
いさみすむ暗佐原をよびく甘志を感一日向今井
等を後ふひくさ勢競ひかゝる敵一ありておやぶくさく
是暗佐士を激励の策一くわぎと原等を甲府小残し
かゝるごと

○織田備後守信秀松平三左衛門忠倫と密に謀りて岡崎の城
を攻めしむる岡崎に泄ゆし一應政公甚しきやゆせ
しとひく寛平三郎重忠を召上和田一往てつとて降
参し三左衛門を刺殺し来ま偏小女を頼むよと仰ありしとバ

寛平とて上和田小むり降参すし一たごうりれ三左衛門
岡崎此士心を通じしものあまきもい兄等を味方小せむや
ともし折くくたまは大小悦て懇一りてたしふくうかくて夜
海ては案内より又とけつかびよりて賜る脇差を
以て三左衛門が死後を二刀刺てのぐれゆる平三郎が弟助大夫心
重も兄があま林志しひて上和田より墮の中ふかくれ居たりが
待らけておつとく岡崎小帰る上和田の者ども追かきまとも
及び應政公感状を賜り羽栗して百貫たふりぬ天文
十六年十月の事と應政公ハ東照宮此御父あり

一説腋差を細りりりり時あまを以て刺殺まべつと考きと
刃をぬる必声をきたり然らばおきありせ追けて汝のぐれ

得^{ステ}ド^フつき棄て^{ハヤカ}遄^{ハヤカ}ぬきと作られしをも取^リりしも眩^カ差^カを
すんしと本^コを^シ部^{エラ}と名^ナひぬ^シて^サされ^バ采^{ハタ}く^ニた^スつ^コ浮^ユ
を^ワげ^テ人^ヲを^ヨ呼^ビり^テ各^{オノ}起^キ合^フて^テ追^ウて^モも^ソく^シ逃^ガれ^テ
歸^ルり^テ又^シ一^ツ説^ハ平^ヘ三^イ郎^{セウ}ハ^ニ忠^{チウ}倫^{リン}が^ニ平^ヘ安^{アン}城^{シヤウ}長^{チヤウ}吉^{キチ}の^ノ口^{カチ}を
ろ^ウ得^テゆ^リ忠^{チウ}倫^{リン}を^{サシ}殺^スせ^シと^シせ^シる^ハ即^チ艾^イ刀^{カウ}と
平^ヘ三^イ郎^{セウ}小^コ賜^ミり^ウち^カれ^シも^ソり^ナり

○天文年中大友義鑑の長朽網下野親満謀反し高崎の
城^{シロ}此^ノ丸^マを^ケ棄^リて^キて^シり^シり^シ佐^サ伯^{ハク}惟^イ常^{ジョウ}ハ^ニ大^{ダイ}友^{ユウ}家^ケ此^ノ
旗^{ハタ}下^ノあ^ガが^カく^ク多^タ杵^キ築^キより^シ池^{イケ}あり^メ佐^サ伯^{ハク}平^ヘ生^{セイ}鷹^{オウ}将^{ジョウ}と^シ好^{コト}
む^シ子^シかり^ノの^タ為^メに^シぬ^シど^シて^シ軍^{イク}た^ラの^ウ為^メなり^シ初^{ハツ}め^ニ時^{トキ}あり^シ
途^チ中^{チュウ}より^シ使^{ツカ}を^カ走^{ハシ}せ^テ士^シを^シよ^ブ士^シ將^{ジョウ}と^シ者^{モノ}ハ^ニ騎^キ馬^バの^{クン}軍^{クン}

兵を引つきて即時に襲う歩士又ハ弓此物主しはく^{ハク}ハの^{ハク}率^{ソツ}を
ひ^キつ^レて^カけ^テ集^スり^シて^シ不^フ意^イの時^{トキ}と^シり^シも^ハさ^ハり^シて^ハ半^{ハン}時^ジ斗^トの間^ノあ^ハま^ハバ^ニ救^ス日^{ニツ}あ^ハり^シ下^ゲ知^チせ^テし^テも^ハ陳^{ヂン}列^{リョウ}整^{セイ}ひ^テ
志^シ外^{ガイ}なら^ズと^シ使^{ツカ}小^コ走^{ハシ}ら^ウす^者ハ^ニ壯^{サウ}ある^者を^シ三^{サン}十^{シウ}人^{ジン}撰^{セン}て^ハ馬^バ乃^ノ
前^マ小^コ折^セつ^シて^シり^シ常^{ジョウ}ふ^カけ^テさ^ラふ^者を^シ息^{イク}長^{チヤウ}く^シ足^{ソク}健^{ケン}小^コ
一^{イツ}く^シ馬^バ中^{チュウ}も^ハあ^ハり^シぬ^シわ^シれ^シ時^{トキ}佐^サ伯^{ハク}士^シ杉^{シヤン}谷^コ次^ジ島^{シマ}太^{タイ}郎^{ロウ}
回^ヘり^シて^シ三^{サン}郎^{ロウ}と^シて^シ兄^{ケイ}弟^{テイ}あり^シお^ホ共^ニふ^シ一^{イツ}番^{バン}事^ジある<sup>志^シ一^{イツ}城^{シヤウ}の^ノ堞^テい^ハ
づ^シの^ノ方^{カタ}上^{ウヘ}より^シさ^ラり^シか^んと^シ目^メを^シく^シり^シる^者小^コ堞^テの^ノ隅^ク
に^シて^シ目^メを^シ俯^{ツキ}垂^スや^リの^ノ柄^ヘを^シ四^シ方^{ホウ}所^所繩^{ツル}と^シて^シ口^{カチ}を^シき^りて^シり^シ
告^ツひ^シ一^{イツ}回^ヘ小^コ攻^{コウ}か^ス時^{トキ}杉^{シヤン}谷^コ見^ミ勢^{セイ}益^{イク}を^シ心^{シン}を^シ付^ツき^りし^者小^コ始^シと^シ
と^シ近^{キン}づ^シを^シ居^ユて^シ走^{ハシ}ら^ウと^シて^シ後^{アト}を^シた^テり^シけ^テ終^{ツク}る^者登^{ノボ}り^シて^シり^シ</sup>

一番小入きり

○北條早雲オダゴロサウヅン盲人モウジンハ無用のおとて小田原願分のめくつ法妙をかゝりて海ふみづけし洗んとせしむる。バ盲人昏四方に逃ちりりる。その中を潜小間小用ひらゆ。

○陶尾張守晴賢大内義隆を弑しければ毛利元就陶を打滅んとせしむる。陶めくつ法師一人を間者として元就の謀を志す。元就始ハかゝるも志しれざりし。や心付ぬ。あ時陶が元来丹後ちりれ志を通じ暗賢をうち破らん。近きふありと浮られしを彼法師やごと陶小告たり。元就又書簡を贈らる。元来ハ周防の岩國の城より。彼書簡を山口より奪とる。さやう志しせしむる。

陶大に怒りて元来を殺しぬ。元就孫かれ法妙を近づけ。よかをかり習ふと称し。かゝるを殺されど陶傳へて悦ぶ。り限たり。元就まゝに軍評定せしむる。敵大軍より宮原にふり。又草津廿日市小がよせる。バ岩國の弘中参河。これ小心をあはすれど裏切させ。陶をうち破る。べし。を浮れ。ちる。是ハ陶を防ぐ地小樞尾の城あり。をハ然る。を要害なり。を渡らば乗来。船を焼く。帰路を塞ぎ。軍をどし。と思ひ。故に。めくつ法妙か。と陶告。々。は。バ。宮。嶋。を。攻。ち。ん。り。弘。中。参。河。隆。包。被。屋。々。と。し。と。陶。ハ。弘。中。が。二。心。を。疑。て。入。り。弘。治。元。年。

十月四萬あり大船よりありて渡りて四方を取
かきとり元船も今度八十死一生の軍と定め吉田の城
を出りつぐた日子斗の兵より後巻せしれりこゝ地陣前
の祝日ごとく船舟小舟より渡りて城近づく心とあ
りせ士一人祝のやみり警宮を出入りせり陶が者ども
元就はいくと同祝さん元船ハ草津九日市へ陶及がよせき
まりん六捕利ありてを攻めを攻めせりなだててや
かりぬとて火立浦ふあされておろしはが引きされぬと
かして是より陶が者どもおろしぬ元就ハひそくに軍の志
くをあり一舟ハ洲屋明神の前より船よりとり天本乃
浮船を多宝架集のかくを適正なる島の町口へ向ふぬし

一手ハ吉田郡山の百姓むろ五千餘小嫡子階元を大将とて
弥山嶋より西の山に此木末小たいまを結つけ百姓むろ
ていしきい松より持せ夜半の隙を相圖小同時火をた
よ吉田川元春ハ船小舟より多浦口小かけ並べし陶が船ども
焼たつめよと謀を定め十月晦日より草津小引退べし
風雨やまぬ元船ハ今夜火立浦よとるべし二日の兵糧を物の
具の上よけけよとて小舟駄どもを先返しく引退く体よも
てなり日もや言ふれば俄小唯今を島へわたりり教を討
ちていよとて船小舟と下知しひひくとお棄算あつし
そ元船が船の火をたしにこもへの梶をちてとて酒の刻
さしりふ火立浦をちりおろし北風をちり吹りちりおろし

おひきこれ船ぞといきみきりて亥の刻をうらう宮橋の西ふりま
て陸あがり船をバ一艘ものごとく火立浦より返さしむら元就
かのめろ法師をひきまわらぬまゆきことたり年頃の志をば
とげつとて海中にまづめられらるや隆元八弥山島お打り
元春八洲屋明神の前よりおまゝる小早川隆景ハかめりて
うら向ひしころ一度小洲の舟をあげ弥山島の木末に結付し
さしい松より火を付しつとて陶が軍兵整をさしどたたるやを
元就おめりて先をわけしつとて陶が者とも敵百人討死しりり
元春隆景も横さほへ進て三浦越中ちと隆景殺を合せ
三浦を生き伏まば内藤内藏允かり合て首をとて弘中
二河も討まし陶が軍さんぐと敗北しとあり陶も旗本城

すうりて隆系と戦ふ元就の兵栗屋又四郎吉先くけて討死
は元就わざと切り切てかえり終りしころは陶ハ引退
て道場山よりありぬれば十一月朔日元就諸軍をあため卯
の刻より午此時ころ十二度乃戦ふ互に討つ者殺をさむじ
陶終いからざるで自害志をも首級とり出して梟せられぬ
討つし西の首口より七百八十餘人とう八百五十餘人とうや元
且西園元就ふたたびき後ひとあり

○宮嶋合戦の前陶伊豫北河原に船をかる日元就も又
船をかりし使をやらしむり陶ハ信とくかりし元就ハ只
一日かきつるしとて即戻さしむといひしころ
まろれば久留島通康受て一言なれと思ひ入しころは元

毛利必勝モウリカネマサべきもの疑ウタガふなぐりばとや三百艘サウをかゝりて
が果ハタして陶敗タウサイまきて滅亡メツボウしき

○野州ヤシウ宇都宮ウツミヤの軍那須ナス小上コカミを撃破ウチヤブし既スデに大将ダイシャウを
も討ウチとるべしと相須ナスの長臣チカウジ大関オホセキ夕安ユキヤン兵ヘイをたもつて北キタ
を逃オクむ人皆ヒトミナを度ドク津ツを破ヤブるべきとつとを夕安ユキヤンすて
一雲イツクモハミをたゞひつて秋風アキカゼ吹フ松マツのこゝろく月ツキをき
りぬといふ古歌コカあり今味イマミ方カタよさせむ根本コンホン此固ココカタもたゞく宇
津宮ツツミヤを攻破ウチヤブらば小田原コタハラより那須ナスを敵テキとせん津ツはいつして
那須ナスをちりかゝるべきや津ツをのろして小田原コタハラをとり
らハせせひまゝに那須ナスの根ネを深コホく帯オビを固カタくく小田原コタハラを敵テキ
小田原コタハラをとりし人ヒトあまを裁サンすべし

○太田オホタ左衛門サエモン大夫ダイフ持資モチスケハ上杉カミヤギ宣政ノリマサの長臣チカウジ鷹タカ狩カトリは出て雨アメに遭アヒ
あゝ小屋コヤへ入イて蓑ミをかんとしよゝうた女メ此何ココナニとも抱ダをばいまだ
して山ヤマぬき此ココも一枝イツエ折オリくおしられ花ハナを未モトムく非ヒびとく
怒イカリり帰カヘりし是コノを突ツキし人のるまは七ナナ童コハまむハさげども
やまづれたのみれひんづゝあゝとて死シすきとつ古歌コカのこゝろ
かゝるべしといふ持資モチスケおぼろきとてそれより歌ウタの志シをよせり宣ノリ
政マサ下シモ総サウの廳エ南ミナミ軍イクサを出イす時トキ山涯ヤマキハの海ウミ色イロを通トスる山ヤマ上ノより
弩ユミを射イけけらまゝんや又マタ津ツ満ミツらんやまゝりがごととてあや
ぶみくおしよ夜ヨ守モリの事コトれに持資モチスケいざこれ又マタまゝんとて馬ウマ
を籠カゴ出イしやがてゆりて津ツハ于コうといふいふよゝとてあゝとてあや
問トふまゝくちり近チカくあゝこの濱ハマまきつるまゝ不フ津ツのまらひをぞ

あししよめふあり千子のあきまきくせえらつといひたり又われ
の時や軍をくはれ時きも我の事なりふ利根川をくは
んとすまきくさくさく浅瀬もあはれ持資又 持資ひき
洞や八ささぐ山川の流き流ふこそははくことといふ歌なり
波音あきき水をわかせといひて事れく波くり持資はふ
道灌と称せ

雪玉実隆の歌ふるふきくこのたしとてや山吹のきよぬ
こころはくを抄中後拾遺和奇集云小倉のあし住持
こはあつりけりる日よのかる人れけりりれが山吹の枝は
おとさくせくけりりり心よえすまきく又の山吹は
さきくいひおせくけりるはくいひきく兼明親王

七重八重をれはさけも山吹のみれひつづたにたききあや
しき○かきりた いニアル歌

○持資京の上りとした慈照院殿義 餐應せんともり慈照院殿
よつれ様りり見あぬ人を必かき傷ふといふ事を持資写
て様けりひと略して様をかり様亭は庭よはるき出仕のね末
しとく側をさく不様飛うふを轂を以てせふさほふた
き伏せれば後よは様首をたまきと恐れ居り持資様つら
ひの人不礼謝して様をかへしきりかてて餐應のりりて
慈照院殿かの様を通るき水りつただおき持資
が狼狽さく林ん待てしゆ不持資をくりの様見ると
ひく地よ平伏も持資衣紋ひきつらりひおるこり

多まば唯人ニ非ざと大小勢もまじりしころり彼様を撃ぎ
しころ戸を様戸といふそれより名ハおされ
やうなり

道灌ハ滝言よりて殺さしり文明十八年七月廿六日
ちり辞世の故とて世云傳すかゝる時けこそ命のど
りかひてなまき身と思ひまじり松田が家の物語もかく
あるころ道灌北和歌の集よりハ戦士をいしり詞
く康正元年乃冬若澤の役より故も味方も入れど二
日よりさしていざみりしころまよぬされもやうこれ武威
はまじり北条憲定のため終は自腹して将兵おの志を
しころありあはらしたあしりかゝる死するもけりしやれ

藤沢のかゝれ松原のむれもまじり男ありしに味方中
村治少浦若系重頭とて京家れ人の世もまじりやくま
扶持とまじりてけりしころ敵のあはらけあは弱小のりて
二つびき輪はがり敵の故付けしころ物ありたりき目をざり
よういゝあしりしころ志がたうして論をたせし目あり
小敵の男はまじりたれやぞ中村がまじりし首をまじりて我
陣も来りてからしころあしりしころあしりしころ壯年あしり
ぬ男れとまじりしころまじり高まじりしころ心持しき撃のあしりた
かゝるまじりしころあしりしころあしりしころあしりしころあしりし
新れり中村がまじりしころあしりしころあしりしころあしりしころあしりし
まじりしころあしりしころあしりしころあしりしころあしりしころあしりし

えこれバ松田物語并世に傳ゆるハ誤なり

○安藝佐伯郡木全知矩といふ者有りは、宗晡といふ毛利元就

の後ハ、さうりければかみ攻らるゝ兵糧すてゝ乏くなり、遂に

降参をすめらるゝ。父祖よりうけ傳へし城をせよとて

人授くべしやとて、除服後、宗晡ハ連歌ふんをよみ、

と元就に傳へて、箭ぶを城中に射入させられり。

秋ゆゑかゝり本まゝに、落葉ふりぬ。一説秋ゆゑまゝに、
本まゝの落葉ふりぬ。

やがて射かへり。

よむか末てまげむ浦浪の月

元就大に感して、困をなめて引退し、経理て和を求めしむれば、

宗晡は、まゝより、係糸せむを、恥辱あるめ、此上ハとて城を出

り、もと元就ゆゑに、さうりてあり。寛客のやゝ小せしれり。

○輝虎武藏の私市此城をかこまれ、時此城ハ後小大なる沼を、

堅固の地あり、本丸を外より見えやうし、築くを、打巡

り、見られし、本丸より二の廓より、廊下の櫓の、

作らるゝ小地、白のかびり、さうりて、人の氣水、

地、のうらび、びり、といふ、地を、白く、み、

比、女、れ、多く、見、し、物、を、輝、虎、を、見、る、事、三、度、及、び、り

か、ま、ま、バ、本、丸、ハ、人、質、の、女、童、を、こ、め、お、き、つ、と、お、り、や、が、て

柿、崎、和、泉、ニ、下、知、し、と、大、手、を、攻、め、せ、ら、れ、り、城、中、あ、り、唯

今、攻、ら、るゝ、と、い、ふ、お、り、ま、れ、先、を、防、る、其、ひ、や、り、近、き、ら、

ま、の、民、屋、を、壊、ち、符、を、く、み、く、後、の、泥、を、打、い、し、関、の、あ、り、を、あ

ガおあききさるぶぢ丸の女童大に驚きささわいで二の廓をさう
て逃すよう大まよ者て防り兵どもささへ内通の者ありて
本丸を打破らましむる或ハ自害し或ハ降人とす
輝虎の謀より力を勞せざり城忽ち陥り
○輝虎と小条と武蔵の忍より陣を合はし時太田美濃守
資房入道三樂ひそり謀を小条に通じ輝虎かきまて
馬副の者も具せぬ唯一騎三樂が陣より退りて三樂が三男安房
ち十二策ありしをひいとてよくおひらけはるよ
いざつが子よせんともくうちつまで帰られ々々三樂が軍兵
ども其猛威おどろきまきりたるもなかりきり是より
三樂も滅し心抜しつらつとや

常山紀談卷之二目次

東照宮大高城へ兵糧を入らむ事

大久保忠俊の事

桶もごま合戦今河義元討死の事

信長上京の事

東照宮大高城を引取らむ事

武田信玄忍びの者を討らむ事

信玄鹿島侍右衛門を呼まらむ事

備前國竜口落城の事 附 浮田直家の事 并 岡剛助高名

遠藤喜三郎三村家親を打つ事 并 備前明禪寺合戦の事

上杉謙信小田原へ攻め入りし事 附 上京の事

一 新發田治長が事

一 信濃國中島合戦の事

一 謙信軍中へ青竹を持ちし事

一 謙信松山城後巻の事

一 東照宮一向宗は黨と厚木坂へ御軍ありし事 附 堀谷半之丞

が事

一 同針崎合戦の事

一 向井與左衛門が感状の事

常山紀談卷之二

備前國 湯淺新兵衛元禎輯録

○今河義元尾張國大高の城へ移居三郎長持を召寄り

織田信長も所へ小城をかき丹家へ水野帯刀善照寺へ

佐久間左京中將へ梶川 就津三ハ飯尾近江守

又丸根へ佐久間大寺助盛重をおいて其外寺於奉母度

瀬も岩あり大寺兵糧を入るハ惣持丸根へ貝を吹べし

寺部奉母度儀の岩より池集り丹家中島より後諸寺

とぞ定むる義元 東照宮の清りし使をもて大

高し兵糧を運入させし戸へあり 東照宮を憐れと仰

てやがておきし酒井石川等信長のよみてあり

くの中へ大高の兵糧入る事とひもくばと申せんと家し
め入らざればと謀りて先兵をわらう福登の松平
左馬助親俊酒井興四郎忠親石川興七郎等曰ふ斗永
禄二年四月九日北条宗高小大守管津丸根をとりてなり
寺部の岩へおしよせよと下知しよ 東照文六八百斗の
兵をひきよめ兵糧米馬よりつませ大高北城二十町ぐり
りよこしひくまひより先陣寺部におしよせ城中ささくぬ
を一の木戸口打破り火をかけて又梅坪におしよせ三の丸ま
で攻入火を放り焼く其焰天をてし関北をすひひき
りよこしゆめられ丸根管津より先をえて三河の故を
むりよこし越り攻入しハいよは故をてし覺ゆるぞとく後法

せよとて寺部梅坪のかけ向ふ其間小 東照宮麾ととてや
まきよひ采おわせし馬千二百匹おつととく事たぐ大高
小運入させまひり丸根管津に残る者ども先をえられども
大く後きし出さざればせんすれ 東照宮やがて軍兵
おひきよめし同法にかへせよと人々今夜の謀畧及ぶを
まきよ能はと申されが関し召まき此甚きなり易き事なだてあり
先思ひもよめぬ寺部梅坪を攻て火をかけ丸根管津乃
軍兵を後づえし出させひきよめて兵糧をいこび入る
あり兵法の神速を貴といひ又其不意し出るといふ
こといふことのつひひられ皆共殿臨濟寺に雪齋小兵書
をよみ習ひまひりよこし謀ハよもかて天性とぞれ

て大将の道を^{ミナト}得^エき^ルも^トも^トど^ト中^ナ々^々此^コ十八^{ハチ}此^コ清^{キヨ}盛^{セイ}の^ノ事^{コト}
なり

○大^{オホ}久^ク保^ホ藤^{フジ}五^{イチ}郎^ニ八^{ヤチ}越^{エチ}前^{ゼン}の人^ノなり^ニが^ガ武^ム者^{ニヤ}執^ニ行^ニく^ル三^ミ河^{カハ}乘^マ
ア^ア吾^ワ姓^{セイ}を^をも^もづ^づる^るも^もさ^さ八^{ハチ}宇^ウ津^ツ新^{シン}八^{ハチ}郎^{ロウ}あり^りと^とて^て大^{オホ}久^ク保^ホ此^コ姓^{セイ}は
ゆ^ゆづ^づり^りが^ガ其^キ志^シを^をし^しふ^ふ功^{コウ}名^{メイ}を^をん^んと^とて^て安^{アン}祥^{ショウ}の^ノ城^{シヨウ}攻^{コウ}小^コ先^{セン}が^ガけ
し^し終^{ツヒ}小^コ討^{トウ}死^シ志^シを^をり^り新^{シン}八^{ハチ}郎^{ロウ}忠^{チュウ}俊^{ジュン}後^ゴ後^ゴ五^{イチ}郎^ニを^を志^シと^とり^り今^{イマ}
川^{カハ}義^ギ元^{ゲン}討^{トウ}ま^まく^く東^{トウ}照^{ショウ}文^{ブン}大^{オホ}言^{ゴン}を^をひ^ひう^うせ^せま^まし^し時^{トキ}夜^ヤ半^{ハン}不^フ
大^{オホ}雨^{アメ}ふ^ふく^く士^シ卒^{ソツ}を^を志^シと^とり^り忠^{チュウ}俊^{ジュン}後^ゴ俊^{ジュン}側^{ソバ}小^コ附^{ツキ}を^をひ^ひ奉^{ホウ}り
度^{タク}を^を棄^キ返^{ヘン}し^し詞^ジを^をか^かけ^け人^ニを^を志^シと^とり^り退^{タイ}く^くる^るも^もあり
○永^{エイ}祿^{リョク}三^{サン}年^{ネン}五^ゴ月^{ゲツ}今^{イマ}川^{カハ}義^ギ元^{ゲン}大^{オホ}軍^{クン}を^をひ^ひさ^さめ^め織^{オリ}田^{デン}信^{シン}長^{チャウ}を^をう^う
つ^つ東^{トウ}照^{ショウ}官^{カン}此^{コノ}時^{トキ}陳^{チン}せ^せき^き勢^{セイ}を^をひ^ひ丸^{マル}根^ネの^ノ岩^{イハ}を^を攻^{コウ}け^けし^しま^ま

今^{イマ}川^{カハ}家^カの^ノ軍^{クン}兵^{ヘイ}も^も勢^{セイ}を^を攻^{コウ}居^イし^し義^ギ元^{ゲン}桶^{ツク}を^をひ^ひさ^さめ^め着^{チャク}陣^{ジン}せ^せ
る^る信^{シン}長^{チャウ}ハ^ハ素^ソより^{ヨリ}鳴^{ナリ}海^{カイ}小^コ打^{ウチ}て^て出^デ防^{ボウ}戦^{セン}せん^んの^ノ志^シを^をり^り老^{ロウ}た^たども
大^{オホ}敵^{テキ}たる^るも^も清^{キヨ}洲^{シュウ}を^をう^うり^りま^まく^く少^{シウ}少^{シウ}海^{カイ}れ^れども^も入^イる^るも^も海^{カイ}軍^{クン}して
猿^{サル}樂^{ガク}に^ニ羅^ラ生^{セイ}門^{モン}の^ノ曲^ク舞^{マヒ}を^をま^まく^くし^しれ^れし^し時^{トキ}款^{クワン}既^キに^ニ攻^{コウ}来^{ライ}すと
告^{ツギ}来^{キヤウ}は^ハ信^{シン}長^{チャウ}少^{シウ}も^もし^しわ^わづ^づ人^ニ間^{カン}五^{イチ}十^{ジュウ}年^{ネン}下^ゲ天^{テン}内^{ネイ}を^を競^{ケイ}ま^ます^す
爰^{ユメ}幻^{マヤロシ}の^ノめ^メし^しり^りし^し處^{トコロ}を^をか^かし^して^てし^しり^りし^しひ^ひく^く心^{シン}螺^ロを^をふ^ふに
も^もて^てや^や世^セ物^{モノ}の^ノ具^カし^して^て主^{シヤウ}役^{ヤク}僅^{ワザカ}小^コ六^{ロク}騎^キ步^ポ卒^{ソツ}二^ニ百^{ヒャク}人^{ニン}を^をり^りか
け^け出^デて^て熱^{アツク}田^{デン}の^ノふ^ふ小^コ指^{ササ}で^で願^{ガン}文^{ブン}を^を神^{シン}殿^{デン}に^ニ納^{ノウ}ら^らし^し中^{ナカ}に^ニ軍^{クン}兵^{ヘイ}
進^{シン}つ^つし^しま^まり^りし^し源^{ゲン}太^{タイ}夫^フの^ノ祠^{イハレ}より^{ヨリ}東^{トウ}を^を見^ミま^まし^し巴^ハ都^ト津^ツ丸^{マル}根^ネ
攻^{コウ}む^むし^しれ^れし^しり^りと^とて^て思^シ烟^{エン}ら^らの^ノゆ^ゆに^ニ流^{リウ}る^るも^も漸^{シユン}に^ニま^まり^りし^し巴^ハ
笠^{カサ}寺^{テラ}乃^ノ東^{トウ}の^ノ道^{ミチ}を^を一^{イチ}文^{ブン}字^ジ小^コし^しり^りし^しで^で岩^{イハ}の^ノ味^ミ方^{カタ}に^ニ使^シを^をこ^こせ^せ也^ヤ

兵をひき具し中務の岩小ぶらうと謀ハ今川の大軍悉く
道へ入り出旗本小勢たる人雨へ山陰うらま切てかり忽後
を決まべと大音声よて下知せられバ士卒皆きこひいさ
みたり旗を志げし山うげより桶をぎたお向つ義元ハ後州
此先陣お務うらと悦び酒りりしてあふ折しも天候
くもり夕ぐらうつらと吹て風をたがうらきまバ信長の
兵かり来り抱きも守りうべ不意此戦小あうらてし斗な
まバ水野大郎他清久一書小首をとく義元此細代の輿を信
長又て欲れ旗本疑なりとて追うらく戦まうらハ義元も
返し合せて戦まうらを服部小平太陰つけ毛利新助も首
をりうら左文字の太刀松倉郷の刀を分捕りすといへり

○信長桶をぎはらうて我元を討とうて後潜小士七八人召具し京小
上上帝都の事ども窺ひ又それより三好が高屋の城へ往て長
慶小をまきうらハ信長が尾張を領地をやらせしべし地小
らうらうらど畿内までまきうららハ三好家の先陣しうらと
いふまじくバ三好うらうくべきを松永弾正誅く其ま止らうら
時齋藤義龍信長を殺さずかふ士十二人塚の津小出うら
信長うらて塚へ入り義龍が士乃旅宿し由た何義龍が討ち
とやうらさ奴系うら汝等一々首を刎をうらとて刀の柄し手を
かけうらうらと少らるる勢し恐るあうらて平伏しうらまバ信長
をぬらうら罵て帰られうらと

○義元討死の時 東照宮ハ大高の城よりやせうらバ蒔屋の水

野下信元浅井六郎助道忠をもて桶をこぼはし義元敗軍
命をおとされぬ今川家の謀ごとくはあけ退ひてくは
へ敵をせよと結ぶべしと告げされりややめあれや
人々やうやうと下野にハコ母の兄弟あるハ推しあはし
たれども今ハ敵とていふ事の中なればりやわまをたごらん
との謀ありて城を明け返るハ逃奔しつとていふ事
弓矢やうの恥辱後世までいひまらるべし浅井を
ゆるめて味方此告をやらうと後を去りてハ帰らめと仰あ
りて了まらばハ二の丸小松せがふ丸入しせまひて持口を法く
むりむりやう夜入て岡崎より井伊賀守忠吉義元の變
を告ぐ今川家此人も駿州へ引くを告ぐと名此上も
兵をたてしはれぬ夜闇とて乱るなりとて月の光を待て
城を打出さるる浅井を御導小用らま池鯉鮒の駒つりせ
るハバ莉屋より討くお所々一揆起るる浅井馬を乗
せ水野下野も使者浅井六郎助案内老しとて大音小音の
らまら皆道をひききて急なくお中へ大樹寺まで引取せ
しひぬ後殿ハ大之保五郎右衛門忍俊あり翌日岡崎へ帰入せ
るるひたり浅井をハ池鯉鮒よりせよとせよ以後の跡おと
く御房子をさたて賜りたり扇のわひ六本たりとて永
く浅井が家れ故とすとりやせより 東照官の信義厚
きはまらし人々あつて後ひきりたり

○甲斐の志はび乃老數十人信玄に叛く事ありて山小屋にたて

り信玄謀^分をすく討^トとすやとさひ疎^トり居^ルる志のび
此者^ト城中^ニ忍^ビ入^リる^{コト}いふあざ入^リがたやと同^トふ内^ノせり
まびくあ^リた^ル志^ト共^ニ休^ムあ^リた^ル志^トい^ハし^テり^トも
料^ハア^リく^レい^ハし^テ信^玄い^ハし^テ山^ノ屋^ノ志^トの^ビ入^リん^ハい^ハし^テ同^ト
小^ノか^ノ者^トも既^ニに^テ能^ク艾^ヲ理^スを^シり^テ影^ヲか^リき^テも^シて^ハバ
其^レ便^ヲ得^ズと^シて^ハ信^玄と^シて^ハ山^ノ屋^ニ向^テ臨^ミし^テり
甚^キま^シび^ク夜^ヲ思^フ透^ス間^ヲ呼^ビせ^シり^ト日^ノ数^ヲを^計て^ヤお
こ^シり^ト出^来め^テ耐^シ山^ノ屋^ノ夜^ヲ討^テ出^ルる^ハ志^トい^ハし^テり^ト
ま^チら^レバ^ハ伏^兵を^みて^ハ討^テし^テれ^タり

○鹿島傳左衛門^{カミジマデン}と^シり^テ者^ト伊豆^ノ人^ナり^テわ^レた^ル比^武名^ヲと^シる^ガ後^ハ小
髪^ヲを^薙ぐ^久閑^ト稱^シ伊^豆山^ノ屋^ノり^テ居^キり^テる^{コト}を^信玄^ト
て三千貫^ノ地^ヲを^けり^テ招^クと^シ久^閑と^シて^ハ年^ヲ老^キり^テ何^ノ事^ナも
奉^公す^べき^{コト}と^シて^ハ出^立り^テ志^トい^ハし^テり^ト尋^ね回^シて^ハま^チあ^リし^テ志^トい^ハし^テり^ト呼^ビ
出^ル春^ノ夕^ノ村^ヲ夜^ノ軍^物を^けり^テせ^シり^テ志^トい^ハし^テり^ト自^ら志^トい^ハし^テり^ト
て^ハ志^トい^ハし^テり^ト信^玄四^方小^ノ大^ノ國^ノ敵^{アリ}と^シて^ハ威^名を^と
ぬ^くし^テれ^ル心^ヲ用^ヒし^テり^ト志^トい^ハし^テり^ト

○永祿年中備前上道郡龍口山の城小寂所治部元常と^シり^テ志^トい^ハし^テり^ト
あり^テ此^ノ時^ニ浮^田直^家既^ニに^テ浦^上を^滅す

直家ハ和泉能家の孫あり能家ハ浦上掃部助村家^ノ
仕へ備前邑久那砥石の城に居たり浦上の長尾村守後
守後入道と貫阿弥といひハ鷹取山の城ありて威勢あり
りて能家を殺害せり^{コト}享祿四年のまあり浦上細川

高國タカクニの加勢カセとて、櫻洲セウにて討死ウチシをせし子監次郎ミツツグといひ、幼サコウサにて居城イシ三石ミシ八播別ハハの境サカイ歌ウタに近チカき氣郡ケ天神山テンジに移ウツリまり興次島キョウジ八浦上ハハ遠江守宗景トシキといひ年長トシナガして備前備前皆ミナ後ノチひ美作ミサカも半属ハナせり守義ウチノリ為能家ヲノノの子コを與家オキといひ父死シす時トキ出奔シュッポンし甚愚オロカとして信中シノナカをこころよむひを食コシの俵ヒラありしう備前備前一帰ヒトり西大寺フシラカ福忍フクニのかたより有アりるを父オトコに懇オノなりたる阿波ア定善チヨウゼンといひ者ヤシ養ヤシひを忍オノたれば牛飼ウシカヒとせり年経トシナヒて召メけり下女シタメをめありせて子コ三人サンニありし直家チヨウカ忠家チウカ春家ハルカをもち天文五年テンモン與家オキ死シに三子サンコ此中ココノナカ中丞家チウシヨウ八菜ハナありて定善チヨウゼンが方カタよりつと子コ二人ニニ六つと四つとありたる松笠マツカサかの尼ニち小丞家チウシヨウ此母ココノハハの姉アネ比丘尼ヒコクニとなり居イるに頼タカりあり直家チヨウカ

物辭モノシあるは生得ウマシなりしが十一歳エホの比ヒより俄ヒトに忍昧ニシとなりて滅メ小菽シヨク麥マクをもちてさく人ヒトが天文十五年テンモン直家チヨウカ十五菜イハありて母ハハの方カタよりけバ母ハハ涙ナミダを流ナし三人サンニ中ナカも兄アニをまじはせて人ヒトをみよもあまじうとせひふすまじうおるはよ人ヒトありてろくバ殿テンよりて草履カウリをもちてせめん物モノはいつたも因果イニ果クワしてかくうれをもちて中ナカんと打ウちあはれしを志シ家カ見えく側近ソバチカ居イり実マコトに忍ニシみおるはハハに母ハハより母ハハよりて汝ニを忍ニシみかかきもねらうとてあやといひてなかく体テイ形カタを直家チヨウカこころに大オホ事コトに誰タレもかきせまかり洩モロしきつやどかきバ其ソノ事コト叶ヒひやどといひて母ハハを忍ニシみハハにれりてと向ムカ直家チヨウカよりく事コトをもち祖父オホジ泉別イヅナをバ鳴村ナリムラが殺コトしたり父ハハ仇カタを

村よりぞ口惜くこそいへりもして一度祖父此帛を遂人と
なふふ高村を殺さし過しものやわきりかたむたは高村
ゆきちバ女佐工とすけむるべきや只是の心をも苦め候とめ
ら父祖の恥を雪むやとなありともや十五の娘はぬ殿と宗
小を公仕らんやうをとりせよかりと免るも此一大事口
出さぬらうつたといひしうら母怒り且恨く密に宗
景は生口で直家初仕へたり直家の智謀をうり直家宗
親寵愛し乙子の城をとりしうら此時三郎右衛門とをいひ
り此比中山備中八沼の城をとりしうら宗景此心よむしうら
あり宗景直家の密談を直家某ハ中山が女を妻とて婚
姻せしむれば老あふふの仰はぬ事不忠をなふ

しきとむらうらこれいふ人カの限をうり見ばや只一此
いそむかゆらうらいんやと宗景悦て何事おもあれ
むらむらむの女志すやうせん物をいへば祖父忠功の者よてい
ひしうら村私殺しうらた君をかりしうら老あふふ願を
かたむらも必誅せむべた老あふの祖父の仇はいへばあふこれを
かたむらして殺すさんと告むら宗景宗景て鴻村汝が祖父を殺せ
し時予幼かりしうらあふは島村権威を次心しうらうら我
もふらむ思ふふあり謀よくしうら高村中山二人を討べし
とゆらむしうらうら直家沼の城川北東小茶園畑とあり
らかり受ふ茶店を設けりふ出く日暮まは此所へ入て
臥し又沼の城をゆたむら打つけしうらあふむをかせり

或時直家中山は川隔りて南の方にすまは道遠く
茶園畑より垂下川を渡らん為ふ假橋をかけさせらまは
常はより孟く往来の時おかけあん物をとりは佐中易き
わづの本とくちまうら直家キとむり得りて悦
宗景は出づり沼より天神山の向ふ狼烟をあぐべしとて
佐中を討得りりととまはしよのりあけるは鳴村がりへ
使をこせ中山謀叛しとて直家下知してこせぬと
沼ふかけ向て直家に力を合せよと下知あは鳴村年老
しとて遠く慮ふいとほあて一騎がけは沼の城に
来るはたを付ん事易くべしと日を約めかくてそ日
小及く沼の存持場は直家もそ日暮ふ成て城に入らり

し鳥とて酒宴小及り夜もいそし海軍備中も成り
り直家己ま今おは爰に都てとては佐中が士も座を
退かぬ直家打ふは体よしてち思ひもけぬ不意は
中を只一刀小伐殺し躍出て大まあつをあぐれば急て相違
く若も城下は忍びく待けまはまはれ先よと城内
池入一六株中何本ぞと尋ねり川向ふ伏し兵も関を
作らうは設ける船を攻入らるるは中が士どもを
切伏く城を攻りちりかく狼烟をいぐは宗景即
鳴村がりし使を馳て告やうは鳴村ゆてはけ若
共とく馬に鞍玉せおは後兵七八人斗りて沼の城に来
る城はとく棄とりて直家な丸ありて門を閉り

村の謀をもあしげ本丸に入ををのめく計を合せ
バ取圍て討とりきり鳥村の軍兵一騎がけしやうとて
末の道に待つけし討とりやがて兵をおして鷹取山へ
わしとすれば防ぐ者なく退ちりぬぬ速家のよぶと
ろく二人を殺ししまより勢強く沼の城に居て砥石は舟の
春家を置終に浦上をあらわして備前を兼平均せり
沼の城に居る元常と姻類ありし元常毛利家よりかれ
て直家と背く直家より滅さんとてとも龍の口は峰高く大川
麓に鏡を要害よりありれば力攻めしと居るべきやうぬめく矢
津小岩をかすへ軍兵をこえ通しり直家園郷女とりし保あ
る者の密よりよぶとをり合せし討速家郷女ハ志りの罪を

かめ来ま首を刎んといわれし討ちの士は向ふしやくを奪
してたり速家より怒り大方向に今ハ途中にこれ
居るうらるが西郡の中を乞食の老女のさきよかぬと立
よりこゝにも不思議もあはかりりるよ年比志をあらわ
すあしむふりあひぬをさうれぬもさきよかぬと流すの者
さばやこぞとすれぬひん幼き時立わぬかろう此母
うよとてはさぬぬを食む女ハ怪しき事すも名へとも俄
あしうちを羽小成さぬハしぬ体よとぞ者々やうしては分
龍の口山は川向ひ金山寺山は谷山船山の城主湊末豊前が
りし小仕へ尋ねおせし乞食の老女をもの母と名づけて人質
しむしり須末ハ故りて元常と不和ありし討湊末が身

より未得しる思の馬を盗み出り打撃山下へ馳下る城中より
何とて馬を奪ふやと呼びても耳もす入らぬ石川原を去るか
けりたれは涙も木も矢倉よりこれを見てかたけ奴討つとよ
と下知しとていんや川を打つより龍の口の城小乗に舟
山の渡り木が士少くいあわたり死罪よりひ中ぶさ由と人の志
せんゆえ道まき家ていあまも追まれ者とも川向ふらして
城中小かくささしへといひたれば元常先山下にかりさるり涙
木が士とも岡に誰まきしとあはれかめを食の老女を川原より
出り帰るも母を殺さぬと声ふる呼りて思ひたれを女ハ
母よてい今あつとありとも母子一所小死んる定よりありとも棄
へこいめらば君よ奉り此憤りば散らんとしひらう中彼女

をハ磔して殺しつゝは郷女悲し怒り母の仇目前にあり
いふして此恨を報ひつゝと歯をかきかたれれば元常も心ゆ
るしてわり岡あくやでけりて老あまは年月経る中元
常が密謀をもつて愛せし園今ハ時を得りて直家小日
を定めて矢津の岩に軍兵松龍の口北本丸北は川向小出され小
舟をかきし密謀とて生口やりて相圖をとりか丸北小の方小閑
所れもろふ元常軍は定まるとあかりを表も元常ハ比所の
欄干小より居ると園つとよりて引くもてふくもひはれ
かひて思ひ役しと年あまは墜はく所ふて一刀刺しそむもあ
損どられバ元常が首をとりかきし密謀し小舟よき道まて
直家のもゆる帰る元常死して後竜の口北城落しりたれば

直家軍兵城入りて守りせり

又一説小寂所元常浮田あり後さうらう直家世父即基
家長船紀伊延原土佐ちを添て攻めせらる元常城を出
山の麓段の原小陣して竹田河系あて軍せし小勇氣あり
アかしく基家も岡山小引歸せり城ハ險阻小據しうきや
すく攻めしと速家家長とも相謀ふ長船紀伊を修
理ハ武畧修りあまど色を好む病ありありれいもどく
し城小入りたむり討むやけもも才智かこたすくや
う者わうでハ叶ひごととてまきり小園清三郎をえやり
うもまバ直家とかく抱いてやみりうさて往經て速家法三
郎をもとくめりて老臣とも小清三郎ハ不義のあま

ひらりと首を切ると怒らまうふ皆彼幼少なり奉公一今年
十六歳と及て一度も過かると傳もども穿入り奥へ入るは小
園豊前を招き清三郎城ひそかに落せし清三郎ハこれなく
謀をいひせせりといひらばさかかくとくひりてあけ
の日はとてさうらう牢城あこれバ清三郎ハ足るごうらまは経
る斗ありさかハ清三郎を盗み出せり籠の口れ向枚石原より
アは僧の草庵を結びく居しりて頼てかき盡りり或
時修理城下は流し漢揃せり尺八の音やえりり人小見
せしむる清三郎が音はを告まらば劍術の師か藤十藏
小姓の早川左門彼是六七人川向ふわうりて其様をえりふ
容貞すれて羨しうりあるが足る人ありと尺八を納めて

菴の中イナリ ウチ入らんとするをひきこきとて免て問うるヒ守喜多ウキタケ家
此士園清三郎とて若あるが毎実此罪ふよりて巳ステ小珠オウせしむ
へきカ家老カシラらひまじきとて爰コト隠カクし居イるふては洞簫トウキョウハ直
家の猶子イハシ基家モトイ堪能カンノとてサナ羽ハひてはかりとて中ナカとて其者
さタは只人タビヒトかゝると受ウケたれば元常ゲンジョウ折具ウチタして就ツ口クチ小コるり人ヒトと
敵方テキガタの者モノなり用心ウチココロはるべしと保イサメまじても直家ナカさへ恐オソるふ
足タラらずとて間者カンシヤとていれわまじ又彼小付カレく謀マカをかさん
とて岡山カンシヤ小間者カンシヤをやりて事のやうを言コトふ清三郎コトノが初ハジメ
がはぶらうとてまじバ元常ゲンジョウ疑ウタガふ心もれく清三郎コトノを飛トビ愛アイ一軍イツクン
場バ小コちとて城上シヨウの小コれ樓ラウに酔スイ外ゲとて事コト平ヘイなむとて赤坂アカサカ
郡クニ和田ワタの城シヨウと和ワ田タ伊織イオリとてを穿キ就ツの口クチ小コ来キて傳イサメまじとも

入イりぞかゝて炎熱エンネツの比ヒ小コ樓ラウに上ウる酒サケもりして日頃ヒコロぬめ
る尺八シヤクハチかりりくつと清三郎コトノが膝ヒザを枕マクラして睡ネムり候ケル
三郎コトノよたひひもまじバ首カビとて人ヒトの易ヤスとていひらるるが
さタのさタつと比ヒより浅アサくさず電チウ愛アイとて人ヒト城シヨウ中ナカに付ツ入イ
人ヒト情シヨウに非ヒどめとせんといひひらるるや仰オホセを奉ウケまじ
勇ユウとすて此城ココロ中ナカにたむう入イり候ケル時トキを得ウケて私シのたさけふ
かへんも志シよあはれとてひかた元常ゲンジョウの脇指ワキサシをもちて引ヒき
首カビを打ウちし袴ハカマをぬぎて首カビを包ツミたがらおあるさきと水のミヅ樽ツケ
よはゆきし早川ハヤカハ左門サカドありて足タラふ元常ゲンジョウの尸カハネハ朱アカおそ
まじり大オホ小コ路ロきして傳イサメとて殿テンをこころとてとて呼ヨバして追オ
かゝて林フモト蒸モトふ下シタアアるるが清三郎コトノハ小コ舟フネにニ乗ノりてせし

めぐるり三丈むらあり

○浮田直家近國を攻めんとす毛利元就備中松山の城主三村純伊守家親より下知りて美作の三星城を攻めさせしむ直家三村と戦ひちば隣敵其隙より来りて謀をもく三村を討つやや思ひ遠友と三郎とより新参の士城近付

遠藤ハもや阿波の人なりとぞ此時備前國津高郡加茂といふ所居りてあり

汝ハ三村成羽より来る時汝も成羽より来て能く知りて美作と思ひ汝ハ三村を陣小入て討ん事をたのむにあらうといひければまき三村もきやすく討てん者おぼはせどもかき仰を承りてまき面目あり志のび入てこそ見いれめとて作州小赴りの身は修理も兄ハ今度

弟死よ一生も有べくは同枕に死んとて是も打つまじり永禄

六年 三村ハ穂村の兵禪寺と山寺小陣してありて

遠藤兄弟夜おやぎれ後此竹林の中より志のび入縁の下ふか

くまおあけくひそく障子外お立より肉はけのぞく

家親柱よりかり居る天のほもるおとと鉄炮をさし雷

火蓋をさされ火を火の火滅り喜三郎あきまて居りて修理

つと外におあおりの人おまきされかりれくを道を通り羽折

の喬お火を上げ高声お番此老ともいひ死りてのあまゆとく

兄が火繩お火をさしつせばやぐて三村が胸をさしぬきり其

銘子れりて今お柱ありとや此時三村がけりて三村孫兵衛親

成といふ老功の兵者りてちつともさわげんくまむすうひとて

屏風を家親が前よたてて外の体をふくまざるなり扱ハ夜討つてハ
毎りきとて物見をせし三星より打て出さるるもきりきり親成
下知しく今夜休中小引延をべしとて松山小引くは家親が死
しつゝまを人皆聞らるるに親成ありせば大に強で敗北せよと
中と人皆のひあへり遠藤ハりの竹林小かく居る三村元
しゆりと覚ゆふら下りふ志づなるに心得ぬ事と思ひながら忍び
て出さるる鉄炮をこすまきり後ふるる事しゆりと機を
も口をくして又立ゆらるるのびり鉄炮をこりて兄弟共不仕あふ
帰るる後ハ一万石の城に居る修理も中村に
寄の城をあぐるもきり家親が嫡子ハ備中様掛の味よる莊野
元祐とり三男ハ三村修理亮元親としゆく備中松山の城あり

父の吊軍せんとして先謀をめぐらし備前上道郡澤田の西妙禪
寺に岩を攻めしるる直家沼の城を出て攻めたる其時ほづみ
して軍にべしとてすぐりし兵四百人夜ふちをれ三棹山よりお
しよせ妙禪寺に岩を攻めしるる某師寺弥五郎根矢典七郎等を入
置らり深しとて直家妙禪寺の岩を攻めしるるれハ間ふ入る者松
山ふとせゆつてかくと告ぐまは三村元はの幸ありとて一族相集
り其兵二万より備前辛川の駅まで兵をわらし一守ハ元祐大
將ゆて七千餘を率て万成山の林をめぐり春日明神の祠に
より旭川をこり旭山の下より良小向く三棹山へかり妙禪寺の
後巻とん一ハ石川左衛門尉五千計しゆく首村ひやけをれお
かり山北北をこる原尾嶋村小出く直家が旗をへりし二時

小勝負せんとうり三村元親ハ一萬人をひきゐり津島村より國府
市場を過て釣のこり城越四津津村北山を越沼の城を攻め
たると保を定て入り入り直家ハかくもたつ沼の城を出古
津の西穴井一陣してたつて又小方成山乃岩より敵三方ふりれ
て押よすこと告来る前小八款死地をちりて城小籠りより又
大軍攻来るとゆふまじつらめたつてさきりふ直家さひひま
どいざ笑ひ此城ごふ攻破らば敵ハ幾方もあると跳ちりてす
つべと抱をやいひもあへん曹をさうく結びて諸のちり城
刀を抽くきりて兼馬小折京二十竹町乃田の中をまゝ一文字一妙
禪寺お岩おかけ向先陣の考たおとて岩を攻り得ん今旗
本ゆく無二無三ふのれや考たくと知もふ力を得く先陣乃

軍兵おめさゆりんで攻りまじ思ひまうり三村が士どもいりて
討死しつれば直家城小火をわけさせ三棹山小折上り山より遙
小款を見おろしひくひより元祐ハ春日北宮の前をさうり玉井
之の前をる國富村近くすみりて又小妙禪寺より討りしれ
し者とも落さうりて敵もや三棹山小より上りぬとつてわ
き立ちしふ小戸川肥後守花房助兵衛國越おち長船紀伊ら
等鉄炮をうちりすしめは中の兵乱まじ立く國富より徳
興寺北間より討り考敷をあらとて元祐五十騎をさうり左右より
猶やうりし敵より延原土佐ちが兵を追立浮田左京・朱
北四半小兒の字の馬おちし法目づけ直家の旗本たうりや
ひらん馳入て討死しし首をバ能勢修理さうりり元親

ハ四御神村矢津の岩近くすむ妙禪寺の煙天をこぎ
てりえのゆきを足てすの城は落るよとひしめきあへり石川
も相國の者たがひめく上六元親とひくつよなりて軍せんといふ
浮田元家丸小兒の字はけし旗山風小吹ちびひさせ一足も
ひくちと叫ひりくおまり原尾嶋を北南へ数度進つて
相戦し備中の兵う崩して石川も竹田村小川入んと川上へ人
数をすむ直家兵をわらうし高屋村まで進めしる石川
ハ八幡村まで取てて元家を目がけ二三度火をちりておれ
浮田の兵らも討て雄町村を東へ向て敗北に元親ハ思ふ仇
をうちぬぎのまなびしひびく西陣の守やぬま兄も討死
しつる半口をしく馬の尻を南小ひさむけ血眼小ありてま

かけ只死移やと罵りて面もあはれ戦れば明石飛澤も圍信法
守此鋒に破らるる元親軍ハ捕らるるを脱れしを授け
少敵を逃らるるを元親軍に軍せし長船を横あひか
来り中少ありて元親軍の中少かけ入んとせし武士も
唐小より付今日たがひ一たび兵を起し仇を報ゆる時み
あひく徳て引退れねおひかればなてかく相支て釣の渡りを
越引とりしなりかくて赤直家を討て仇を抜もべしと志深
一處に光源院殿義輝を三好弒し靈陽院殿昭没落し
織田信長をよめも京ハ信長村井長門をす後少し靈
陽院殿志伸へも北に備後の鞆に居りし毛利家をす
まじらば信長元親がし使を以て此夜將軍よくみせし西國

の通路をふさぐ織田家の忠を致さばやがて信長師を出り中
國を討平け備中備後を元親の世つべりと誓紙を添てしむ
くまゝハ元親一族をあつた將軍家の後ひつりともさざり
の大功もあらざるに殊に浮田家將軍に降したるハ並て思ひ
設けし仇を報ゆる事も叶はざらん信長の命をむす隨ひ
將軍を討すのみセ織田家の力をいのみ浮田を討滅せしべりと
謀りしハ皆尤と一回と三村孫を親戚同孫太郎義兼父
子ハ父の仇を報ゆる他人の力故か事やんばさ弓矢とて羽
忠と孝との二ツより外た君君事なればとも臣ハ臣とす
ハ有へういふとこそぬい信長とばかりてかこひていれを真実か
アも欺ま虎狼のめく世小稱する信長に後ひく將軍を討ま

のみセ毛利家を敵にたさん事悪逆不義の名道了る信
長將軍の威をかりく五畿内を討ちて後ハ將軍をあかど
京都を追出さる及ぶ悪逆のいりどやか人をもめと事
もんるもまべくもたると諒も事とも元親を始る事武運をひ
らくべき時あふ小衆後背く事と人々怒りられハ三村父子
ハせんくこれ成羽に降す常山島郡の城主三村上野分守徳
元親の後裔とて高德親成をすて至る人ハ必將軍へ告せし
トせむとす信長の援兵を乞て始成羽を攻めしべ
といひるまば此義に同じて信長のもやうの使を遣成羽も
らくなき後をかきり親戚ハ何とぞと事ハ成ひし事
靈陽院殿より傳ふこの思召より事ハ兵をいそ

里にちバ松山を攻^トべしとヤリりかくて安藝備後の兵七千三
百餘市^トむけらま^シつ六天正三年五月廿四日松山へ攻^トりし。松山
ハ之ひもよ^クず城遂^ニ陥^ル元親も城を落去^リて阿部山あり
々々を同^ニ九日討^トりり^キ靈陽院殿へ往^リ進^スと

一説元親城を攻^テ落^シさま^シつ^テ時弁彦助とりし士元親のり^ニ依
ち^テひて安部山^ニ入^リて追^ッつ^テ元親と名乗^リ城上^ニ降^リて討死^セん
其間^ニ小友と落^レのびて運^ビをひ^キき^クと^シども元親す^レや
てもの^レぬぬ^レお^レれ^テ使者^をと^リて来^マき自害^スと^シどもと^シて色
一^ノ小再三^ニ諫^メめ争^ヒひ^シども^モそ^レ能^クた^カと^シひ^シら^ハ位^ニ今^ニ生
の暇^モ一^ノか^クと^シを^ヤり^テ玉村^とり^テ元親の母^を送^リて^シけ
さてそ^レま^シより城^上より元親^が匿^ル所^をと^リて告^メる^ヤ

と門をひ^クた^カま^シバ内^ニ入^リ此城を枕^ニせん為^ニ小来^レれ^ルり
名のり^クた^カる^ク小戦^ひあ^リし切^レ伏^テて討死^スり^テ元親ハ使
者^を待^テれ^ルふ^キま^シづ^キも^ナん^ニバ松運寺の道^上に出^テ氏^を
ま^シぬ^レ城^中よりひ^クり^テ使者^を待^テり^テけ^レく自^レ殺^スれ^ルし
と^シる^ヤ

ろま^シつ^テり児島の常山を攻^ムんと^シ毛利家の大将小早川伊
豆守光重^ハ小三村父子相^加り成^リ羽^ニて勢^を揃^ヘて六月四日山
村^ノ児島^ノ小隊^一手^ニわ^ケれ^テ先陣^浦兵^部宗勝^用吉^{より}
宇^ノ若^木一^ノか^クま^シてお^シよ^セ六日の朝^大多^クの木戸^口へ攻^ムせ^まり
高德^ハ後^をま^シる^ヤ味^方あ^リし累^年毛利^家より矢
を^ヤり^テ三村^家の謀^主れ^ルバ^レと^シり^テと^シて嫡^子

源五郎高秀タカヒデと共に鉄炮テッポウをうちあそぶは、徳の弟小七郎高重タカシゲ
ハ箭つぎをやらし、射を射あそぶ。此三人は防がれて、子負ふ者、
あつあり。七日の暁、及て城中最後の漁富め、城外に退け、
まばりれ、攻め入り、高徳の母我先、死なんとて、
柱に刀柄をむすび付、走り、けりぬれて死しぬ。高秀
十五歳、はあゝ、残らんハ心がりな、んとし、腹を切ぬ。
二男ハツ、成し、し、せ、刺殺しぬ。高徳の妹、な、
藝州鼻高山の城、ハ、徳の弟、あ、ま、は、
乳のあつりを、し、通し、同、枕し、ぬ、
此三、あ、が、弓、あ、の、の、女、房、と、あ、て、
死す。

斗や、三村が一族、今を限、一軍せん、
の上、こ、て、薙刀、あ、り、て、出、る、を、局の女、も、
よ、と、く、立、忍、び、命、を、全、う、せ、敵、一、人、も、
し、く、死、さ、す、や、あ、り、切、て、走、り、
の、ん、ん、立、し、長柄の鎗、を、や、り、突、て、
士、八、十、三、人、今、日、を、限、切、て、浦、が、七、百、
死、狂、ひ、戦、ひ、れ、ば、討、つ、者、多、く、
々、れ、だ、ま、さ、は、の、妻、兵、部、を、よ、び、
ハ、國、平、が、造、り、
て、身、を、し、れ、と、い、ふ、が、武、名、
と、い、ひ、く、城、に、歸、り、自、害、し、
高、徳、も、腹、を、切、ま、
高、重、も、

錯しく其身も後切りぬ事も乱ましく首をとり 鞆の津
小送アツリ常山の山々ふを城跡にけり

○永禄三年謙信八千の師を相列小田原にむこし 関東に諸將
皆々あひまひひく十五万に及べり 旗本ハ高麗寺山の林原小
原一先陣太田三樂ハ小磯に陣し小条の兵戦ひしりて城に
引入りてバ蓮池を攻入るるに 謙倉一赴き鶴岡の八幡
まに詣らる上杉憲政の長直等も皆群衆に成田長安警
固の者と争論の事あり 誅罰に及ぶべきとていともあまを宥ら
る成田護信は怒を恐る病しく出だ 田を打とまをりハ非あり
同年六月謙信上京せり六月廿八日京都に到り七月七日光
源院殿禪と掲一吉光の太刀番金三十枚を致しり光源院殿

より管領の任又諱の字を賜り兄弟の義に準せしむる命
を承り越後に歸らるるを

謙信相州に攻入る時京都より近衛関白前久公を進え
管領の職を承る事此時より始りしなり又鶴岡に系
借し管領の職に任じ近衛実白前久公下向ありて光源
院殿此公方より大和兵部少輔使よりいひける 孰り
是なる事をもりて又謙信上京のより三千計の人数にて
越後を出られしより光源院殿に掲して後京場住吉
所遊覽し國に歸り及て光源院殿小三好松永謀
叛の相ありしれんていし書に賜りいひける 弛上り 誅
罰をた由密にやされしを三好松永も察しりしや

深く恐まじりて程なく永禄七年三好長慶河内の若江
て病死し其子松永かくし翌年の春に死して公方を
関し召越後へ清書を賜はり其處に松永此を泄す
らんといふに光源院を殺し其子あり

○護信小田原の蓮池を以て攻入り鎌倉に赴き軍評
定あり時新田因幡守治長其比十五歳あり其子とて
かきまじりてなれば一定味方敗北し其子に謙信怒りて
舌のやりしをなすすふ物をいひそとつとまじりて治長居連り
僅でしより君臣の義を絶せし戸りひちば小田原に地あり
北条家の先陣し君を討つるを酒匂川のほとり
ゆてはくやせし討つる奉らん物をいひ護信其時をい

らげ天晴剛の者し神妙ゆもや明日の後殿をせし
命せしれり治長軍をいひすむとてやぐりし小田
原をいひしり治長は景徳の世に及て二心あり其子景勝
を討つる新田五十孫兩城をとりて三年を経て城落
れば治長漆月毛とり馬二隻三尺五寸有る光重の刀を抽括
て大軍の中へ入付死し其子此をいひて色白尾かみ
かりし其子の汁をいひけり漆れば年月を累て後其紅の
糸をいひけり其子いひて其子いひて其子いひて其子いひて
乗しやりのり又景徳治長を攻らし其子治長が士は波多野
忠左衛門といひ其子の考らし景勝のよせし道にすらしの中
に近き方を三淵といひて一騎打乃嶮岨あり其子いひて其子

勝のうち通らまへん時むじと組て刺殺えんとし三淵の岩穴
よがれ居りしる系後院を打向ふ時皆口々近き方より
よせ多くとすは景勝字は兵法に迂を以て直とくとりて
けり危きこと不意此患ありといひて三淵より道とま
かりてすすれは波多野が志とく宛し成りぬ

○永祿四年七月甲州謙信より入らまへし間者ども越後小
帰して信州の士二心ある者ありしを五月上旬信玄川
中嶋に赴て死罪おぼしめし是より疑を生じし者多し又
和利が嶽の字小士卒多くを負討死しし由を生口するを謙信
聞て三軍の福ハ抵難より生じしゆり是より勞しむ多し
むじとそ二ツ八月おとく師を川中島より出さるる事と士大将

を盡く呼あつり各謀を問ふ不存ざる旨を書きまへて出り
休擇りうちて上中下は三等とて其下策を用べしといわれ
る此ハめつらむと怪しむる事ハ謙信のいづく上策ハ既ニ款
のきふするまゝとてこれを待たざる謀ありし由を待設ける
所へ攻入んといふや後へ中策ハ教を評議せしゆり下策を
用ひて貝津の城をふと越西條山に陣し姑く敵の後巻を待ん
是兵を死地ニ陥るふゆりや信玄はよせバ廿時後夜を一時
に決まらざりし信玄貝津の城に入ら圍む攻ん又信玄川中
嶋に陣どりて吾陣法を塞ぐたむる吾軍のよせは後を
涉らば直に貝津の城に向ひて攻破せん信玄必救来るべし
其時又一戦しとかなんば討死せざるは下策を用るしを批

かゝると八月廿四日西條山に於て入陣しきりたるは信玄後
春して皆討死せしむる廣瀬のわたりを越て貝津の城
に入らざりしが九月九日の晩謙信士大将をらつめ明日は
ま必打て戦ふべきよし今夜雨のふれりしをさうちりし
其不意に攻撃し用意せしめて寅の刻ふまで川中島に
兵をひかひ先陣ハ柿崎和泉後陣ハ其粕備後あり果
て十日の卯刻むらうし信玄一万餘の兵を率ひ筑摩川に
く出善光寺の要路に待ちしる謙信軍をすめて一手
ごりの合戦をこらむ謙信旗をまきくらしなりて切らば信
玄此旗をわらぬらん甲斐の兵討ちしる老教をまきくらし
西條山の甲州は軍兵一踏かけ小馳来り候て後信兵をま

め勝を全せしむる其粕備後後陣の兵討ちしむるを
て信玄の旗をぬらむるしむるしむる又乱れしむる
しる引退く其粕をよ因て西川をよ陣をよ三日ありし
引しむる

是謙信実記に據るしむるしむる川中島の戦い
多く分明なりしむる一説は天文廿三年八月十八日川中島を
戦はると謙信旗本半町計敗北しむるしむる宇佐美駿河
定行横あひふかや信玄の兵大に乱れしむる河内へ退入
しむる老多し信玄ハ川の中へ馬を立しむるす小謙信
は曇子しむる包しむる肩衣しむるしむる白きよめをひしむ
て旗を包しむる三尺計の刀を抽しむる虎のあししむる鹿

毛の馬に打たれし信玄ハびづくに在やと呼ぶ原大隅信玄の
事よ爰よあふさやうろく者よと罵り送るて突られ
はと外と謙信川へ馬を乗こみ信玄よかけよせ三刀が
斬まふ信玄持し軍配固るも切をて手負て既小
危りり原大隅教原弥右衛門鎧をぬりのたてりけて
謙信をさきさきふ馬のさんづらりり川の海より飛
入りしるる信玄の馬副此者ども信玄の馬は川岸より
らざり物とれりり守佐美後河守謙信より賜
るる感状も天文二十三年八月十八日川中島に於て松陰
をもて信玄れも本を突崩しりり中のせりり弘治
二年三月廿五日ふも川中島にて軍らり謙信筑摩川を涉り

夜軍ふかれられバ板垣駿河一条六郎渚角を後初彦
源五郎輪形月織部山本勘介を始りて討死し老ま
甲斐の先陣上山より来り前後に逼り謙信川
を涉りしりり此時守佐美後河守先陣して功
あり又永禄四年九月十日川中島の戦い武田の先陣敗北に
信玄の旗本を以てりり長尾政景を陣をてりり
アタタ渡り越中一隊衆をこころて鎧を入道し甲斐
軍敗小せりり皆謙信家臣に賜り感状傳りり甲陽軍
嶺川中島教原の軍を附令して一度とあはれりり又一説
し永禄四年九月十日に我の本ハ謙信の敵といひ傳りり
事なりりり然も謙信の感状を傳りて謙信実記と傳

合す... 九月十日戦あり... 疑を... 又上杉義
春入道入菴京都に閑居し... 有る... 徒然の作... 甲陽軍鑑を
よませ... 事実... 事... 高坂が死後此
事も多く書載... 川越の軍も年月大にたがひ人姓姓名も以て
の外... 事多く又... 人の名... 謙信は世の... 予... 此あや...
此書更... 復... 事... 今を以て是を視... 甲陽軍鑑... 贋物あり又...
今世... 川中島五戦記といへ... 此書ハ川中
島の戦五度... 然れども其中... 戦... 非... 又... 書... 信... 鶴... 借て忍

の成田を... 関東の諸将... 離散... 小...
を敵... 僅... 徳信の... 越後... 甲陽
軍鑑... 心得... 関東の諸将... 後...
い... 其年... 事... 虚妄論...
○謙信ハ長... 高... 左... 脚... 氣腫... 是... 竹... 杖... 提... 士卒...
く... 物... 事... 木綿の...
急... 造... 小... 車... 笠... 竹... 如意の遺風也...
竹... 三尺... 杖... 提... 士卒...
ま... 梁... 韋... 竹... 如意の遺風也...
北魏の兵鐘離城を攻... 時梁... 韋... 以て後援させ

らまゝなり北魏の將揚大眼勇將して数万騎を率て我ひ
し小敵ハ素木にて造り興ふる白角の如意を執て軍兵
を下知し切らるる事史に云ふなり

○永禄五年三月小条氏康父子武田信玄父子数万の兵以て武
州松山の城をかゝりしと謙信八千は兵をもて後卷せられ
し十五日既橋より是侍りし城落ちるとすはるるははれら
あまより山の根は株へかよせ打破るなり敵はづめするあは
北条氏田父子四将の大軍より合せし軍せん事を全むるを
まことよりよく刀根川を打りしりかゝる船橋を切流を
山は根の城ふれしを忽攻めし小田助三郎を始として皆を
切りしりかゝる使を四将の陣小やりて松山の城に向りし中

を承て出向ひし小城早く攻めし軍はよりし事なり
弓矢の礼義小背ては唯今山は根の城を攻めしは恨むるや
らんとしひ送らるる氏康かりて軍せんは信玄のいづく
今勝しうとも謙信は四人しかりし人小説らるる事口
をいさとして志ひしとめてさく止りし信玄実なるは日
比謙信の勇氣倍々しるも我がしるは松山の城落て怒るる
くこれ其鋒小むらひがく虎を恐るるをめぐりしを
又一説小此時信玄兵をよめ免太靴を穿し軍威嚴然
きり越後此守兵も物の具しとや打向んとせしを謙
信のやく信玄かり来る事非ざりしん為なり馬の鞍
をわたり甲冑をぬいで休息せしなりといふ事しるは

信玄引返されし事なり

○永禄六年十月十五日一向宗は堂と厚木坂より軍行りし時
一揆より蜂谷半之丞渡邊源兵衛先より味方ハ上
村庄右衛門黒田中平兵衛を合を渡邊源兵衛田を突傷しつる
味方さそひかりて退しつるバ蜂谷も渡邊も引退て細かハ
て小かゝを水野藤十郎蜂谷いふのがれやどと詞をかくれハ
蜂谷ぬきとありしつこと突て若十郎いふでうらまはし敵
をさいざあんとて鎗を地はきしつて手ふはばたをいさ
かけしつるバとつ水野もあまめて近づき得て蜂谷もさそ
ふととて又さづふ引退く蜂谷が鎗ハ三間柄の中をさふと
くく長吉が鍛も又あまが備もく物を貫もつてしり

東照宮御馬を乗出させ蜂谷めむせと御詞をいさ
つるまはしつるも尺どして逃し松平金助あふれやどと追つむれ
バ蜂谷ふととつり殿なればこそ逃されは身ハひくまひ
とりて取てかたし金助を五六度もつとさつりぞけしつるが
蜂谷鎗をあげづきつと重助を突傷し東照宮御馬め
ととく又御馬を乗つけさせまは蜂谷引返し逃退しつる
蜂谷其後ハ先づつて一向宗は堂をなかりて降参りそ
まよりく願やて終つ一向宗の堂の者ども罪を御赦めて
つりし後二連木の合戦ハ中平八郎牧宗次郎鎗を合
つるふ蜂谷少おまもつるが蜂谷子とく鎗ハ合つる
いふしり者もつ成半之丞めて他人鎗をさつる人我ハ

切合カキやでよといひすてカチ刀を提サげて敵の中へ飛トビ込で二人お
 ぶフ伏フく小河井カハノ正徳マサノリといふ老鉄炮テウテウをかまへくヒキおふきま
 かるキ正徳マサノリがくれあきまなまマさうちチくクふ痛手イタテあり
 小起オキけりてそこをババリキやりリくクまマでも蜂谷ハチヤつひヒ死シくク
 とぞ又此正徳マサノリあり射セらラた場バ後ノチ殿ノ後ノチ殿ノ射シ後ノチ
 其ソノおひヒ討ツちチと呼ヨぶブ正徳マサノリ生ナまマつツきキ踏フたり
 故手テオヒ負オくクまマひヒくクかカつツまマあり其時トキみミとトりて
 弓箭ユミヤ神ガミと誓チカひヒくク手テ負オくクはハたタ生得シヤトクのちんチンむムぞとい
 ひくヒくクより今川家イマダノケふフわワめて正徳マサノリといひヒくクとあり又降クるル
 痛手イタテおひヒくクと其老母オウボのオまマていイふフ首尾エビの有アつツとぞと問トせ
 さサはハくクくクつツつツと答コまマばバうウれレや士シの戦場セウヤウわワて矢ヤお

けくハ常ジョウの事コトありり手テ負オくクはハのあアりリセバ死シくク
 とも冥途メイトの面目メンボクたタくクなナらラどドといひヒくクとぞ戦國セウコクの時トキ婦人フジン
 此コノ身ミも弓ユミヤ矢ヤとト家ケおオ生ナまマつツハ志シはハ大オふフくクやヤあアるルのみ
 想オモへヘるルなナらラ事コトなり

永禄七年正月十六日三河一向宗の黨と針崎中終日れせり
 合アりり中根ナカネ森モリと名ナのりて一番陰イツキを合アいイ一揆イツキ相アいイハ波ハ
 走ハシ半ハまマ逐ツつツがガ鎗カサネをすスくク刀カタナをぬヌくク飛トビ込コどドり中根ナカネも刀
 を抜ヌきキ互オ互オ手テ負オひヒ相アいイふフくク處トコロ小指ウヂ後ノチ士シ郎ラウ三郎サンラウ波ハ急キウ
 松目マツメがけ追ツかカけケくクを渡邊ワタナベが父源フタノ五左衛門イヅサエまマすスけケ来キく
 鷗殿ウノノを突ツ伏フくク東照宮トウシヤウ序シ序シどドて序シ序シどドつツ鎗カサネを提サ
 ちチ陰イツキどドみミきキまマひヒくク突ツ伏フくク手テかりリババ引キ退タイくクを

又く石川十郎左衛門渡邊源五左衛門競かんとて 東照宮
向ひ奉る内藤甚市弓より一矢を射貫くが
半之丞父をかき負て引退さるまじり物わづれせり内藤と
渡邊が甥ありけれども御急難の時あつりては村倒せりと
なり

○謙信信玄と和平を結んとせしれ時長遠寺の僧を使ふせし
此僧ハ遊説の人なり謙信の傍に甲斐士に向井與左衛門
といふ者やあると問ふふとまじりて又創の痕やると問ふ
れよ面ふ刀は癩有と申し謙信のいそぐ川中島の戦ひ名を
かけてはまは城後よりは通を交をぬり顧て一刀斬りて
ぞがしよもまじりてやとひつふやがしよもまじりて萌

黄の胴肩衣と鎗はらと有とぞりか書簡を添て向井にお
くられり此を世ふかへり感状とりし其書は川中島の事
をのせられりとのりたり



Faint, illegible vertical text impressions on the right page, possibly bleed-through from the reverse side.

早稲田大学図書館

011688998095